



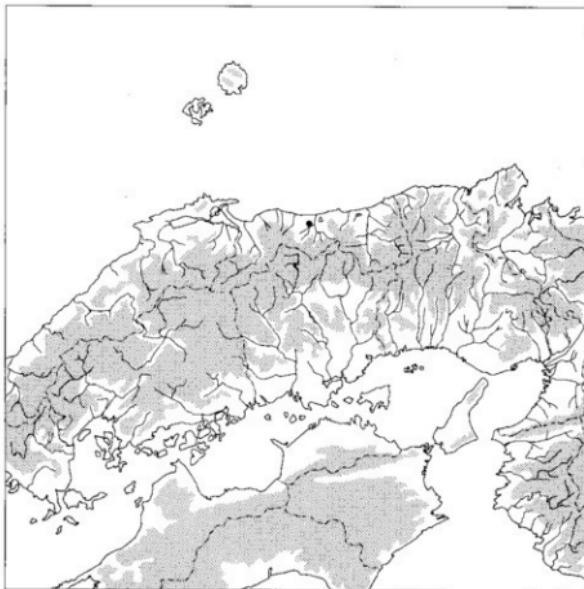
# 中峰古墳群発掘調査報告書

平成9年度

倉吉市教育委員会

なかみね

# 中峰古墳群発掘調査報告書



遺跡略号 4DWN

平成9年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572759

## 序

この報告書は、鳥取県倉吉土木事務所が実施する一般国道 313号  
橋りょう整備工事（和田橋）に伴う事前調査として、倉吉市教育委員会が平成9年度に倉吉市和田字中峰・道和寺において実施した発掘調査の記録であります。

今回の発掘調査により、弥生時代末期から古墳時代前期に連続する土壙墓群と古墳群を明らかにすことができました。これは、当地方の古墳時代のはじまりを考える上で貴重な資料となるものではないかと思っております。

本報告書が、多くの方に活用され文化財へのご理解を深めて頂ければ幸いに存じます。

最後に、調査に際してご理解とご協力いただきました鳥取県倉吉土木事務所ならびに地元の方々をはじめ、関係各機関および各位に對しあから謝意を表する次第であります。

平成10年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足 羽 一 昭

## 例　　言

- 1 本報告書は平成9年度に倉吉市教育委員会が、一般国道313号橋りょう整備工事（和田橋）に伴う事前調査として、倉吉市和田字中峰・<sup>なかね</sup>道和寺において実施した発掘調査の記録である。
- 2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

|                          |                       |
|--------------------------|-----------------------|
| 團　　長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）  | 黄田 廣幸（文化課課長補佐兼文化財係係長） |
| 調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長） | 根鈴 義之（倉吉市文化財保護審議会委員）  |
| 調査員 根鈴 雄（倉吉博物館学芸員）       | 森下 哲哉（文化財係主任）         |
| 手嶋 義之（倉吉市文化財保護審議会委員）     | 加藤 誠司（文化財係主事）         |
| 岡平 拓也（文化財係主事）            | 岡本 智則（文化財係主事）         |
| 調査補助員 山根 雅美・松田 恵子        |                       |
| 事務局 石田佐喜子（教育次長 9月まで）     | 新田 征男（教育次長 10月から）     |
| 生田 淳美（文化課課長）             | 福澤 昌子（文化財係主事）         |
| 山崎慎之介（文化財係主事）            | 金田 朋子（臨時職員）           |
- 内務整理 泉 美智子・世浪由美子・妻藤 君江・松嶋あつ子・竹歳 晚子・山崎有香子
- 現場での調査は岡本・加藤が担当し、森下・根鈴曾・岡平・山根が補佐した。遺構写真撮影は、岡本・森下・加藤が行った。
- 遺構の図面整理は岡本・加藤・山根・松田が担当した。遺物実測および観察は岡本・根鈴曾・岡平が担当した。遺物写真は岡本が担当し、加藤・松嶋・竹歳・山崎が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤が担当した。
- 第IV章は鑑定の分析結果について、鳥取大学医学部法医学教室 井上晃孝助教授にご寄稿いただいたものである。記して謝意を表します。
- 本書の執筆は各調査員が討議し岡本が行った。編集は松田・世浪が担当した。
- 遺構測量のための基準杭測量を鶴技術コンサルタント株式会社に委託した。
- 予備調査において検出した資料も本報告書に掲載した。
- 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1:50,000地形図「倉吉」「大山」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、平成9年修正測量の1:2,500国土基本図 倉吉平面図を使用した。
- 挿図中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第V座標系の北を示す。
- 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。
- 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

## 本文目次

|       |           |    |
|-------|-----------|----|
| I     | 発掘調査に至る経過 | 1  |
| II    | 位置と歴史的環境  | 1  |
| III   | 調査の概要     | 4  |
| 1     | 遺構        | 7  |
| 2     | 遺物        | 34 |
| IV    | 鑑定        | 46 |
| V     | まとめ       | 48 |
| 報告書抄録 |           |    |

## 挿図目次

|      |                         |    |
|------|-------------------------|----|
| 第1図  | 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図          | 3  |
| 第2図  | 中峰古墳群調査区位置図             | 4  |
| 第3図  | 中峰古墳群遺構全体図              | 5  |
| 第4図  | 1号～4号土壤墓・土器棺墓遺構図        | 8  |
| 第5図  | 5号～8号土壤墓遺構図             | 9  |
| 第6図  | 9号～11号土壤墓遺構図            | 11 |
| 第7図  | 12号～15号土壤墓遺構図           | 12 |
| 第8図  | 16号土壤墓遺構図               | 13 |
| 第9図  | 17号土壤墓遺構図               | 14 |
| 第10図 | 18号・24号土壤墓遺構図           | 15 |
| 第11図 | 19号・20号土壤墓、3号溝遺構図       | 16 |
| 第12図 | 21号～23号・25号土壤墓遺構図       | 17 |
| 第13図 | 26号・27号土壤墓遺構図           | 18 |
| 第14図 | 1号・2号溝遺構図               | 19 |
| 第15図 | 古墳群調査前・後地形測量図           | 20 |
| 第16図 | 1号墳遺構図                  | 21 |
| 第17図 | 1号墳主体部遺構図1              | 22 |
| 第18図 | 1号墳主体部遺構図2              | 23 |
| 第19図 | 2号～4号墳遺構図               | 25 |
| 第20図 | 2号墳主体部遺構図1              | 28 |
| 第21図 | 2号墳主体部遺構図2              | 29 |
| 第22図 | 3号・4号墳主体部、4号墳周溝内埋葬施設遺構図 | 31 |
| 第23図 | 竪穴式住居遺構図                | 32 |
| 第24図 | 溝状遺構遺構図                 | 33 |
| 第25図 | 1号・2号土壤遺構図              | 34 |

|                   |    |
|-------------------|----|
| 第26図 土壙墓群出土遺物図1   | 37 |
| 第27図 土壙墓群出土遺物図2   | 39 |
| 第28図 古墳・その他出土遺物図  | 41 |
| 第29図 五輪塔法量凡例      | 42 |
| 第30図 鉄器・玉類・石器遺物図  | 43 |
| 第31図 銭貨拓本         | 45 |
| 第32図 中峰古墳群遺構変遷模式図 | 49 |

## 図 版 目 次

- 図版1 遺跡 調査区遠景 調査区全景
- 図版2 遺跡・遺構 1号・2号土壙墓、土器棺墓 3号土壙墓 4号土壙墓 5号・6号土壙墓 7号土壙墓
- 図版3 遺構 8号土壙墓 9号～11号土壙墓 12号～15号土壙墓 16号土壙墓 17号土壙墓 18号土壙墓
- 図版4 遺構 16号～18号土壙墓 19号～21号土壙墓、3号溝 20号土壙墓遺物出土状況 21号土壙墓  
22号・23号土壙墓 26号土壙墓
- 図版5 遺構 1号墳 1号墳主体部蓋石、棺内
- 図版6 遺構 1号墳主体部基底石、小口石、完掘 2号墳 2号墳主体部蓋石、棺内、完掘
- 図版7 遺構 3号墳 4号墳 4号墳周溝内埋葬施設 壱穴式住居・ピット列
- 図版8 遺構 1号土壙 2号土壙・溝状遺構 溝状遺構
- 図版9 遺物 土壙墓・土器棺墓出土土器
- 図版10 遺物 溝・古墳・壹穴式住居出土土器
- 図版11 遺物 鉄器・玉類・石器
- 図版12 遺物 五輪塔・宝篋印塔

## I 発掘調査に至る経過

平成8年度、鳥取県倉吉土木事務所から、一般国道313号橋りょう整備工事（和田橋）の計画が提示された。開発予定地の所在する丘陵付近には、平成6年度に調査した夏谷遺跡II地区の古墳2基が所在する。また、踏査によって尾根筋にも3基の古墳を確認している。分布踏査の結果、開発予定地内に墳丘状の高まりや土器片を確認した。このため、予備調査を平成8年(1996)5月21日から5月30日まで倉吉市教育委員会が実施した。この結果、古墳の周溝・弥生土器・須恵器などの遺物を検出して、遺跡の存在が明らかになった。倉吉市教育委員会は、鳥取県倉吉土木事務所と協議を図った結果、やむを得ず掘削される尾根先端部分の3,800m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することとなった。調査は、倉吉市教育委員会が主体となり、平成9年(1997)4月1日から10月3日まで実施した。

註 加藤誠司 「16. 和田地区（中峰古墳群）」「倉吉市内遺跡分布調査報告書IX」 倉吉市教育委員会 1997

## II 位置と歴史的環境

中峰古墳群は、倉吉市街地から西方へ約2km離れた倉吉市和田字中峰・道和寺に所在する。遺跡は、国道313号線の東隣に位置し、北条町と境を接する大山（標高197.9m）から南側に派生した丘陵の南端に所在する。調査地の古墳群と南に広がる水田面との比高差は約30mを測る。中峰古墳群の北東に広がる丘陵地には、平成5・6年度に調査された夏谷遺跡が所在する。夏谷遺跡は、丘陵尾根を中心に弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落、E地区とH地区の2ヶ所には4世紀後葉頃～5世紀後半頃の古墳群が所在する。中でもH地区は、中峰古墳群と同じ丘陵の標高90m付近に所在し、箱式石棺墓を主体とする円墳2基を調査した。

中峰古墳群の所在する倉吉市西郊周辺には数多くの遺跡が存在する。以下、分布図（第1図）範囲内の遺跡を中心概要を述べる。

旧石器時代の遺跡は未確認であるが、中尾遺跡(60)ではナイフ形石器（黒曜石製・安山岩質各1点）、削器（安山岩質1点）、長谷遺跡(113)ではナイフ形石器（安山岩質1点）が出土している。また、上神51号墳(83)・高鼻2号墳(3)の調査中に細石刃石核が出土している。その他、横谷遺跡群でナイフ形石器・楔形石器が各1点、藤井谷地区予備調査でナイフ形石器が1点出土した。

縄文時代の遺跡は、主なもので20箇所余りが確認されている。取木遺跡(15)では前期の焼石群と堅穴式住居と平地式住居が各1棟、津田峰遺跡では後期の堅穴式住居が1棟確認されている。松ヶ坪遺跡(122)は晩期の配石遺構・甕棺墓が出土している。また、中尾遺跡は縄文時代前期～中期と推定される落し穴84基、長谷遺跡では、縄文時代後期を中心とする落し穴57基を、横谷遺跡群では47基確認している。他に、イキス遺跡(14)・立塚遺跡群大山遺跡(13)・頭根後谷遺跡(?)などがある。

弥生時代の遺跡は、久米ヶ原丘陵を中心として集落跡が存在する。その多くは後期の集落で、古墳時代にも引き続き営まれる。主なものとして、環濠集落の後中尾遺跡(41)、鳥形スタンプ文の出土した中峯遺跡(28)・夏谷遺跡・西前遺跡(74)・クズマ遺跡(81)・大沢前遺跡(25)・中尾遺跡・遠藤谷峯遺跡(26)・白市遺跡(27)・沢ベリ遺跡(62・63)などがある。

墳墓は、前期の土壙墓群としてイキス遺跡・向山古墳群宮ノ峰支群(105)がある。後期には、四隅突出型埴丘墓が3基出土し国史跡に指定された阿弥大寺埴丘墓群(37)、主体部に割竹形木棺が検出された山根（藤和）四隅

突出型埴丘墓、四隅突出型埴丘墓の可能性がある柴栗古墳群(72)の弥生埴丘墓、手培り形土器の出土した三度舞埴丘墓(69)・方形の削り出し埴丘墓を2基検出し吉備系の大型壺が出土した大谷後口谷埴丘墓(29)などがある。終末期から古墳時代初頭にかけては、土墳墓群から古墳へと変遷していく過程がうかがえる二タ子塚遺跡(9)がある。

倉吉市西郊に存在する前期古墳は、国府川中流域左岸の微高地上には、舶載鏡三面および種々の農耕具類が出土した国分寺古墳(56・前方後方墳・全長60m)をはじめ、四王寺山から派生した丘陵上に立地する大谷大将塚古墳(67・前方後円墳・全長50m)、鍬形石・琴柱形石製品などの出土で知られている上神大将塚古墳(73・円墳・直径30m)がある。向山北東端に位置する向山古墳群ノ峰支群19号墳(方墳・一辺27m)・21号墳(円墳・直径30m)は竪穴式石室を主体部とし、国分寺古墳とほぼ同時期に築造されている。猪山遺跡(3次)1号墳(75・方墳・一辺16m)第一主体は、普遍的に見られる石棺とは異なり、竪穴式石室を模している。

5世紀代には、古墳群の変遷が明瞭なイザ原古墳群(64)、帆立貝式古墳が5基群集し墓道の復元ができる、周溝内から鹿皮模様をもつ人物埴輪が出土している沢べり遺跡2次(62)がある。

後期古墳は、小鶴川右岸に所在する東伯耆で最も早く横穴式石室を導入した大宮古墳(円墳・直径28m)・家ノ後ロ1号墳(円墳・直径15m)、山際1号墳(円墳・直径10m)・2号墳(円墳・直径10m)(132)がある。また、天神川下流域右岸の福庭古墳(円〈方〉墳・直径35m)は整美な切石を用いている。向山にある向山6号墳(前方後円墳・全長40m)は仕切石によって玄室内に三屍床を設けている。切石を用いた石室に石屋形を設ける三明寺古墳(円〈方〉墳・直径18m)など古墳時代後期には横穴式石室が盛んに造られている。

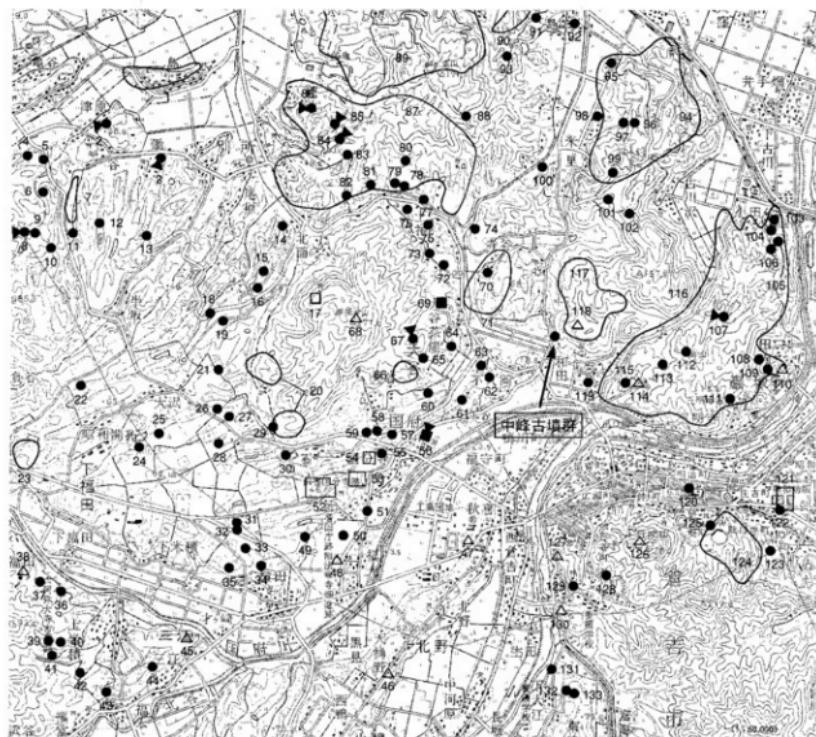
終末期には、追葬のできない小型の横穴式石室をもつ多角形墳が取木遺跡・一反半田遺跡(16)・両長谷遺跡(21)などで確認されている。

その他、東鳥ヶ尾古墳(11・円墳・直径15m)・高鼻2号墳(3・前方後円墳・全長26m)・イザ原古墳群・頭根後谷遺跡・大山遺跡・郊家平古墳群(10)・服部古墳群・クズマ遺跡など、5世紀後半~7世紀初めにかけての古墳が調査されている。

古墳時代の集落としては、後口谷遺跡(42)・西山遺跡(78)・郷塚遺跡(57)・宮ノ下遺跡(55)・琴柱形石製品や移動式の甕が出土した夏谷遺跡がある。また、不入岡遺跡(61)では住居内から作り付けの甕が検出され、非在地系の土器が多数出土した。

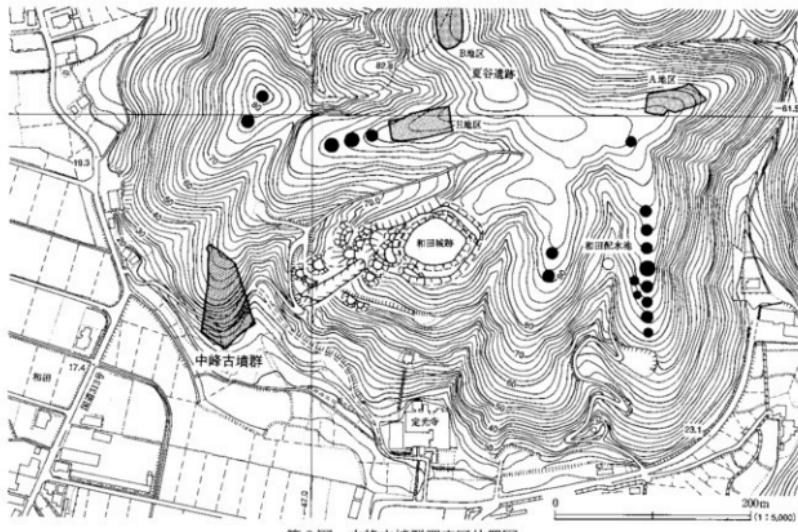
奈良時代に入ると久米ヶ原丘陵の東端部周辺に伯耆国衙(52)・伯耆国分寺(53)・伯耆国分尼寺(54)・大型建物群を検出し官衙跡と推定されている不入岡遺跡が近接して設けられ、伯耆国の政治・文化の中心地となる。その

|           |            |              |             |            |
|-----------|------------|--------------|-------------|------------|
| 1 島遺跡群    | 13 大山遺跡    | 25 人沢前遺跡     | 37 阿弥大寺埴丘墓群 | 49 鳴ノ掛遺跡   |
| 2 大塚山古墳   | 14 イキス遺跡   | 26 遠藤谷峯遺跡    | 38 下福田城跡    | 50 今倉遺跡    |
| 3 高鼻2号墳   | 15 取木遺跡    | 27 白市遺跡      | 39 奥田遺跡     | 51 河原毛田遺跡  |
| 4 西焼ス古墳群  | 16 一反半田遺跡  | 28 中峯遺跡      | 40 箕ヶ平遺跡    | 52 伯耆国衛跡   |
| 5 清水谷1号墳  | 17 四王寺跡    | 29 大谷後口谷埴丘墓  | 41 後中尾遺跡    | 53 伯耆国分寺跡  |
| 6 清水谷古墳群  | 18 コサンコウ遺跡 | 30 向野遺跡      | 42 後口谷遺跡    | 54 伯耆国分尼寺跡 |
| 7 頭根後谷遺跡  | 19 道祖神峰遺跡  | 31 福寺田遺跡(1次) | 43 福本家ノ上古墓  | 55 宮ノ下遺跡   |
| 8 二タ子塚6号墳 | 20 古墳群     | 32 東福寺田遺跡    | 44 上野遺跡     | 56 国分寺古墳   |
| 9 二タ子塚遺跡  | 21 両長谷遺跡   | 33 岩屋遺跡      | 45 三江城跡     | 57 邦摩遺跡    |
| 10 郊家平古墳群 | 22 昭和開拓遺跡  | 34 矢戸遺跡      | 46 市場城跡     | 58 打塚遺跡    |
| 11 東鳥ヶ尾古墳 | 23 稚児ヶ墓古墳群 | 35 福寺田遺跡(2次) | 47 北ノ城城跡    | 59 古神宮古墓   |
| 12 大仙塚遺跡  | 24 大道谷遺跡   | 36 下小堀遺跡     | 48 今倉城跡     | 60 中尾遺跡    |



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

|              |            |                |               |            |
|--------------|------------|----------------|---------------|------------|
| 61 不入同遺跡     | 76 東扶間古墳   | 91 天王山遺跡       | 106 向山古墳群堤谷支群 | 121 大御堂廃寺  |
| 62 沢べり遺跡(2次) | 77 ドロケ遺跡   | 92 島遺跡         | 107 向山6号墳     | 122 松ヶ坪遺跡  |
| 63 沢べり遺跡(1次) | 78 西山遺跡    | 93 島古墳群        | 108 上養水遺跡     | 123 弥平林1号墳 |
| 64 イザ原古墳群    | 79 谷畠遺跡    | 94 上下古墳群       | 109 養水古墳群     | 124 古墳群    |
| 65 小林古墳群     | 80 桜木遺跡    | 95 上下129号墳     | 110 田内城跡      | 125 梅田遺跡   |
| 66 大谷古墳群     | 81 クズマ遺跡   | 96 上下213号墳     | 111 三明寺古墳     | 126 打吹城跡   |
| 67 大谷大将塚古墳   | 82 上神119号墳 | 97 上下210号墳     | 112 三明寺大将塚古墳  | 127 四十二九城跡 |
| 68 大谷城跡      | 83 上神51号墳  | 98 船渡遺跡        | 113 長谷遺跡      | 128 高畦古墳群  |
| 69 三度舞埴丘墓    | 84 上神48号墳  | 99 米里第1遺跡      | 114 和田東城跡     | 129 萩才寺1号墳 |
| 70 黒喜山9号墳    | 85 上神44号墳  | 100 米里鋼鐸出土地    | 115 向山309号墳   | 130 赤岩山紫跡  |
| 71 黒喜山古墳群    | 86 上神45号墳  | 101 米里第2遺跡     | 116 向山古墳群     | 131 大烟遺跡   |
| 72 柴栗古墳群     | 87 上神古墳群   | 102 下張坪遺跡      | 117 夏谷遺跡      | 132 山際古墳群  |
| 73 上神大将塚古墳   | 88 曲226号墳  | 103 小田鋼鐸出土地    | 118 和田城跡      | 133 下西野遺跡  |
| 74 西前遺跡      | 89 曲古墳群    | 104 向山古墳群口支群   | 119 平ル林遺跡     |            |
| 75 上神猫山遺跡    | 90 北尾古墳群   | 105 向山古墳群宮ノ峰支群 | 120 山名氏館跡推定地  |            |



第2図 中峰古墳群調査区位置図

他の寺院として、佐波理匙が出土した大御堂廃寺(121)・石塚廃寺がある。

平安時代以降の遺跡は寺院跡として、四王寺山山頂に四王寺(17)・大日寺遺跡群・広瀬廃寺がある。城跡は、小鴨氏の居城岩倉城跡(48)、伯耆守護山名氏の居城打吹城跡(126)などがある。集落跡は、山名氏館跡推定地(120・15世紀)、今倉遺跡(50・15~16世紀)が分かっているに過ぎない。墳墓は、不入岡遺跡・打塚遺跡(58)で方形のマウンドを持つもの、宮ノ下遺跡で土壙墓、福本家ノ上古墓(43)で五輪塔の下部埋葬施設、家ノ後口1号古墓で宝篋印塔の下部施設が調査されている。

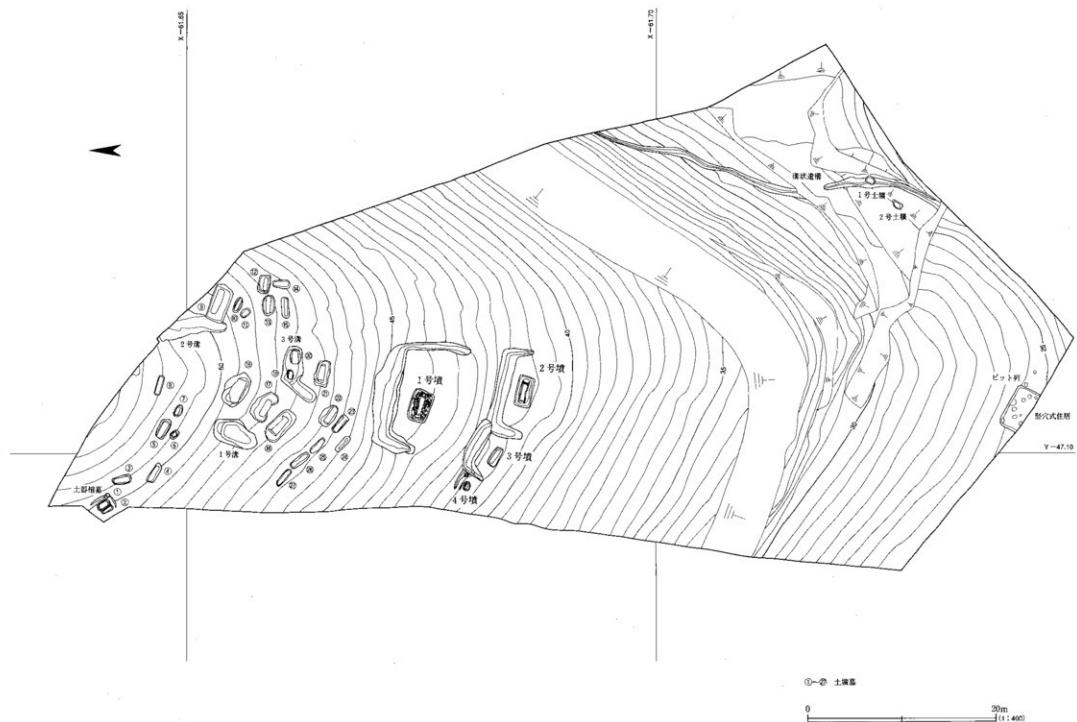
### III 調査の概要

調査は、調査前地形を平板測量した後、古墳と思われる高まりに断面観察用ベルトを十字に設定し、人力による表土除去作業を行った。表土除去後、遺構の検出を行い、掘り下げを行った。

調査地の基本層序は、I 茶褐色土（表土・旧耕作土）、II 橙褐色粘質土（礫混じり粘質土層）、III 黄褐色土（DKP：大山・倉吉輕石層）の順である。遺構の検出は、II層上面で行った。

遺構の測量は国土座標による4mメッシュを組み、1号～4号墳の主体部と遺物出土状況図についてはS=1/10で、その他の遺構はS=1/20で実測した。調査地の地形測量は平板を使用し、S=1/100、25cm毎の等高線で測量した。調査面積は3,800m<sup>2</sup>である。

調査の結果、弥生時代後期の土壙墓27基、土器棺墓1基、土壙墓に伴う溝3条、古墳4基、竪穴式住居1棟、溝状遺構1条、土壙2基を検出した。



第3図 中峰古墳群遺構全体図

## 1 遺構

### 土壙墓群

調査区の最高所、丘陵尾根先端部と南斜面との傾斜変換点である標高46~52m付近で土壙墓27基を検出した。上壙墓群は、さらに北側の調査区外の丘陵尾根上にも広がる可能性があり、今回の調査ではこのうちの南端部分を検出した。

土壙墓の中には木棺痕跡を検出したものもあるが、ここでは総称して土壙墓とした。土壙墓は、14号土壙墓を除き、主軸がすべて等高線に沿うものであった。土壙墓は、墓壙の規模によって大中小の3つの規模に分けることができる。大型は4基（9号・16号～18号）、中型は18基（1号・3号～5号・8号・10号・12号～15号・20号～27号）、小型は5基（2号・6号・7号・11号・19号）である。また、27基の土壙墓は、溝によって大まかに4群に分かれるが、土壙墓の配置・構造などからさらにグループ分けすることが可能である。北西部の一群は、中・小型の土壙墓8基が等高線に沿って東西に連なる。北東部の一群は、大型の9号土壙墓を中心とし中・小型の6基とで構成される。南西部の一群は、大型の3基を中心に中・小型の土壙墓6基とで構成される。南東部の一群は、21号土壙墓を中心に3号溝が北側を囲み、溝底には中・小型の土壙墓が2基連なる。

木棺痕跡を確認したものは8基であった。木棺痕跡は、上層断面および小口板痕跡によるものである。小口板痕跡は、小口板が側板に挟まれる形態のもの5基（6号・9号・10号・12号・21号）、小口板が側板を挟み込む形態のもの3基（18号・22号・23号）であった。

土壙墓はその大部分は素掘りのものであるが、2段掘りのものが13基（1号・3号・6号・7号・10号・12号・13号・15号～18号・20号～21号）存在する。土壙墓は、1号・2号、9号・2号溝が切り合う他は単独で検出した。

遺物は全体に少なく、棺内には全く遺存していないかったが、16号・20号土壙墓の2基で供獻状態の上器が出土した。また、1号溝ではまとめて遺物が出土した。

**1号土壙墓** 土壙墓群の北西隅、2号土壙墓と上器棺墓の間に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ1.48m・幅1.02m・深さ0.16m、下段が長さ1.14m・幅0.58m・深さ0.39mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.55mを測り、底面は北側が4cmほど高い。底面の北小口幅0.57m・南小口幅0.48mを測り、北小口側が広い。頭位は北側と推定される。土壙墓の西側に並行して隣接する2号土壙墓との切り合いは、1号土壙墓のほうが新しい。

遺物は、土壙墓の東側検出面から甕片1が出土した。

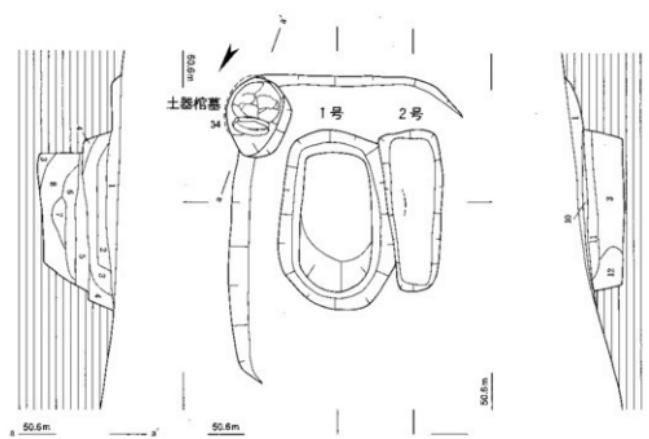
**2号土壙墓** 1号土壙墓の南西隣に並列する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方の規模は長さ1.34m・幅0.46m、検出面から墓壙底までの深さは0.34mを測り、底面はほぼ平坦である。底面の南小口幅0.36m・北小口幅0.23mを測り南小口側が広い。頭位は南側と推定される。遺物は出土しなかった。

**3号土壙墓** 1号土壙墓の約1m南東側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ1.97m・幅0.90m・深さ0.39m、下段が長さ1.74m・幅0.41m・深さ0.29mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.68mを測り、底面はほぼ平坦である。底面の南小口幅0.45m・北小口幅0.34mを測り、南北小口側が広い。頭位は南側と推定される。

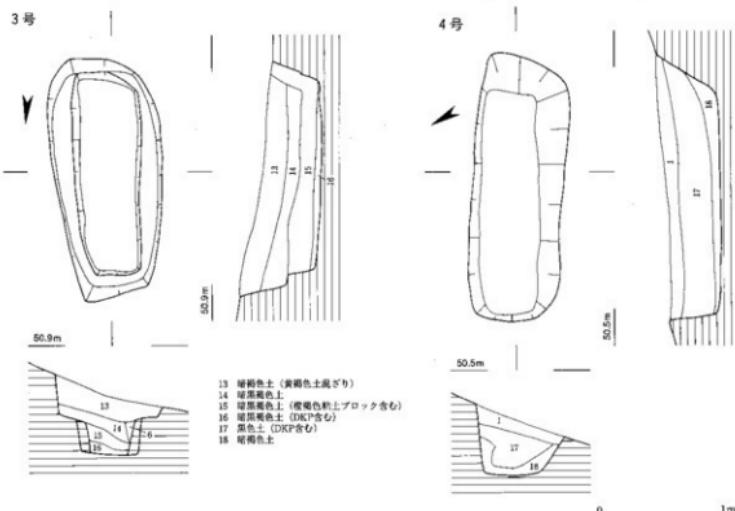
遺物は、土壙墓の周辺から甕2、甕3・4、高环片5、竹管文の施文される甕片6・器台7が出土した。

**4号土壙墓** 3号土壙墓の約2m南側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方の規模は長さ2.20m・幅0.74m・深さ0.45mを測り、底面は東半分が若干高くなる。頭位は東側と推定される。

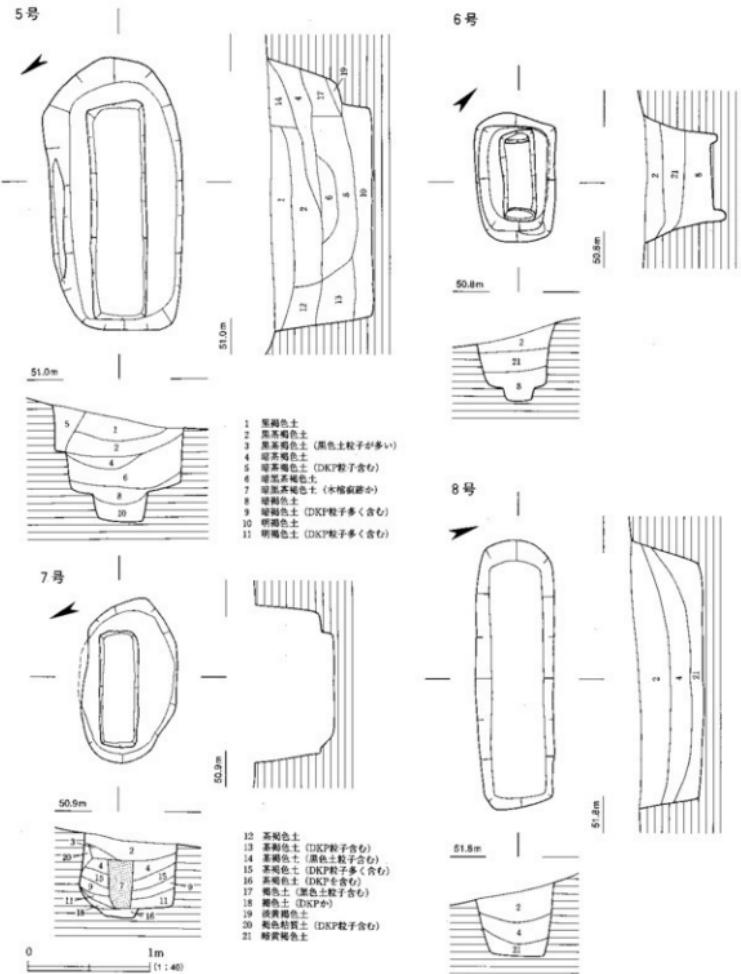
遺物は、土壙墓の周辺から台付壺片が出土した。



- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 白黄土
- 5 稲葉褐色土 (茶褐色土混ざり)
- 6 稲葉褐色土
- 7 黑褐色土
- 8 黑褐色土 (黒色土混ざり)
- 9 白褐色土
- 10 稲葉褐色土
- 11 稲葉褐色土と糞土の混ざり
- 12 黑褐色土



第4図 1号～4号土壤墓・土器棺墓遺構図



第5図 5号～8号土壤墓遺構図

**5号土壤墓** 4号土壤墓の約3m東側に位置する。墓壇の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ2.26m・幅1.12m・深さ0.59m、下段が長さ1.70m・幅0.45m・深さ0.26mを測る。検出面から墓壇底までの深さは0.85mを測り、底面は東小口側が5cm高い。底面の東小口幅0.38m・西小口幅0.36mを測り、南小口側が広い。頭位は南側と推定される。

遺物は、土壤墓の周辺から甕小片が出土した。

**6号土壙墓** 5号土壙墓の約0.4m南側にはば並行して位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ1.06m・幅0.66m・深さ0.43m、下段が長さ0.57m・幅0.25m・深さ0.11mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.54mを測り、底面は西小口側が5cm高くなる。頭位は西側と推定され、底面には、両小口に小口板を固定するための溝が掘られていた。溝の長さは東側0.27m・西側0.18mを測る。

遺物は、土壙墓周辺から甕小片が出土した。

**7号土壙墓** 5号土壙墓の約0.7m南東側にはば並行して位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ1.28m・幅0.78m・深さ0.56m、下段が長さ0.93m・幅0.32m・深さ0.08mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.64mを測り、底面は南側が1cmほど高くなる。頭位は南側と推定される。2段めの掘り方と断面の立ち上がりから幅0.2m以上の木棺が納められていたと推定される。

遺物は、土壙墓周辺から甕小片が出土した。

**8号土壙墓** 7号土壙墓の約2.5m北東側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方の規模は長さ2.21m・幅0.66m、検出面から墓壙底までの深さは0.53mを測り、底面はほぼ平坦である。墓壙底の西小口幅0.44m・東小口幅0.42mを測り、西側が広い。頭位は西側と推定される。遺物は出土しなかった。

**9号土壙墓** 調査区の北東隅に位置し、西端は2号溝と切り合う。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方の規模は長さ3.98m・幅2.00m・深さ0.69mで、土壙墓群中最大規模を測る。底面の西小口幅1.68m・東小口幅1.65mを測り西側が広く、底面は西側が10cm高い。頭位は西側と推定される。埋土の堆積状況と断面の立ち上がりから、墓壙掘り下げ後の床面に約10cmほど暗黄褐色土を貼り、その上に長さ2.73m・幅0.70m程度の木棺を納めたと推定される。

遺物は、土壙墓外の東側検出面から甕8・9・10・11、鼓形器台12、大型器台13が出土した。

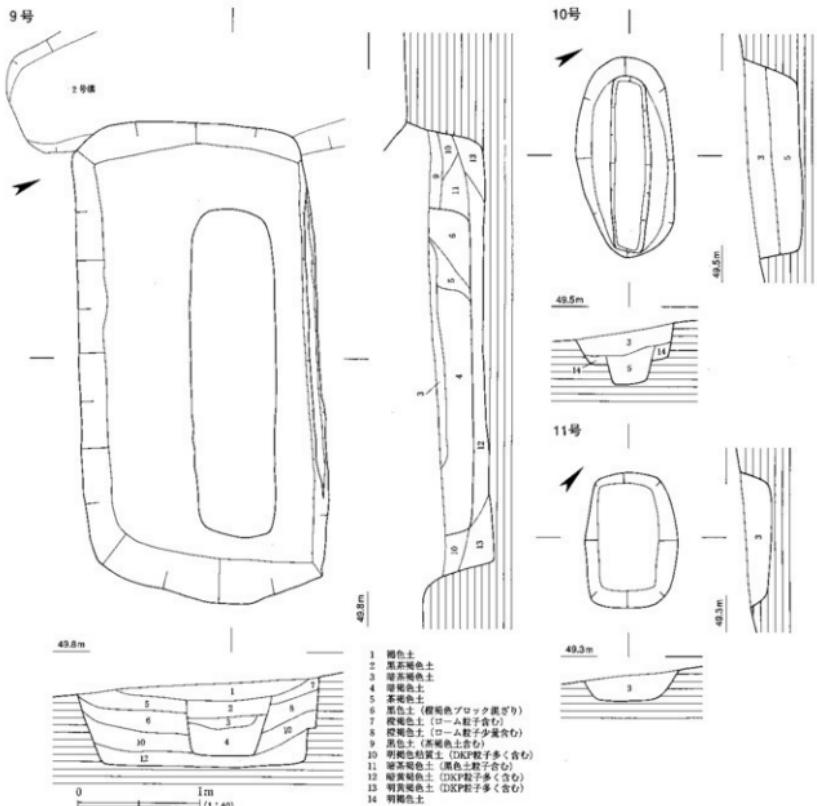
**10号土壙墓** 9号土壙墓の約0.3m南にはば並行して位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ1.65m・幅0.81m・深さ0.27m、下段が長さ1.46m・幅0.34m・深さ0.27mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.61mを測り、底面は西側が3cm高い。底面の西小口幅0.22m・東小口幅0.17mを測り、西小口側が広い。頭位は西側と推定される。2段めの掘り方と断面の立ち上がりから長さ1.38m・幅0.40m程度の木棺が納められていたと推定される。遺物は出土しなかった。

**11号土壙墓** 10号土壙墓の約0.3m南側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方の規模は長さ1.12m・幅0.76m、検出面からの深さ0.21mを測る。底面の西小口幅0.49m・東小口幅0.46mを測り、西側が広く、頭位は西側と推定される。遺物は出土しなかった。

**12号土壙墓** 11号土壙墓の約2.5m南東側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ1.96m・幅1.31m・深さ0.35m、下段が長さ1.37m・幅0.46m・深さ0.07mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.42mを測り、底面は西側が8cm高い。底面の西小口幅0.38m・東小口幅0.24mを測り、西小口側が広い。頭位は西側と推定される。2段めの掘り方と断面の立ち上がりから長さ1.24m・幅0.45m程度の木棺が納められていたと推定される。遺物は出土しなかった。

**13号土壙墓** 12号土壙墓の約0.2m西側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ2.19m・幅1.32m・深さ0.43m、下段が長さ1.92m・幅0.48m・深さ0.12mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.55mであった。底面の西小口幅0.38m・東小口幅0.35mを測り、西小口側が広い。頭位は西側と推定される。遺物は出土しなかった。

**14号土壙墓** 12号土壙墓の約0.2m南側に斜面に直交して位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方の規模は長さ1.83m・幅0.88m、検出面からの深さ0.36mを測る。底面の西小口幅0.48m・東小口幅0.54mだが、底



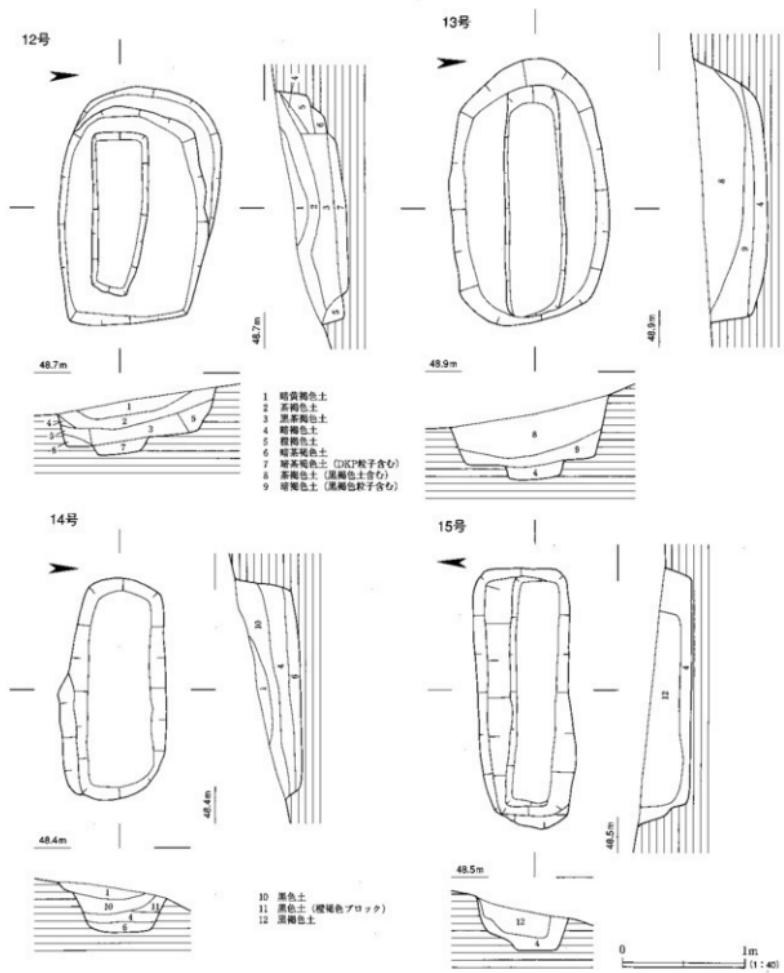
第6図 9号～11号土壤墓遺構図

面は西側が8cm高いため頭位は西側と推定される。

遺物は、14号土壤墓から約3m下った南側斜面で転落した台付壺14・鉢15が出土した。

**15号土壤墓** 14号土壤墓の約1m西側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ2.14m・幅0.75m・深さ0.25m、下段が長さ1.89m・幅0.31m・深さ0.07mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.32mであった。底面の東小口幅0.33m・西小口幅0.31mを測り、東小口側が広い。頭位は東と推定される。遺物は出土しなかった。

**16号土壤墓** 土壤墓群のはば中央に位置し、主軸は1号溝と直交する。検出時には、埋土の状況がすぐ西隣に位置する1号溝と非常に酷似しており、溝の可能性が考えられたが、掘り方が2段であり、下段は比較的整った長方形プランを呈し、底面も平坦であることから墓壙として捉えた。墓壙の平面形は隅丸長方形だが、北側がやや歪に膨らむ。掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ3.91m・幅2.52m・深さ0.27m、下段が長さ2.88m・幅1.02m・深さ0.60mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.87mを測る。底面の東小口幅0.89m・西小口幅

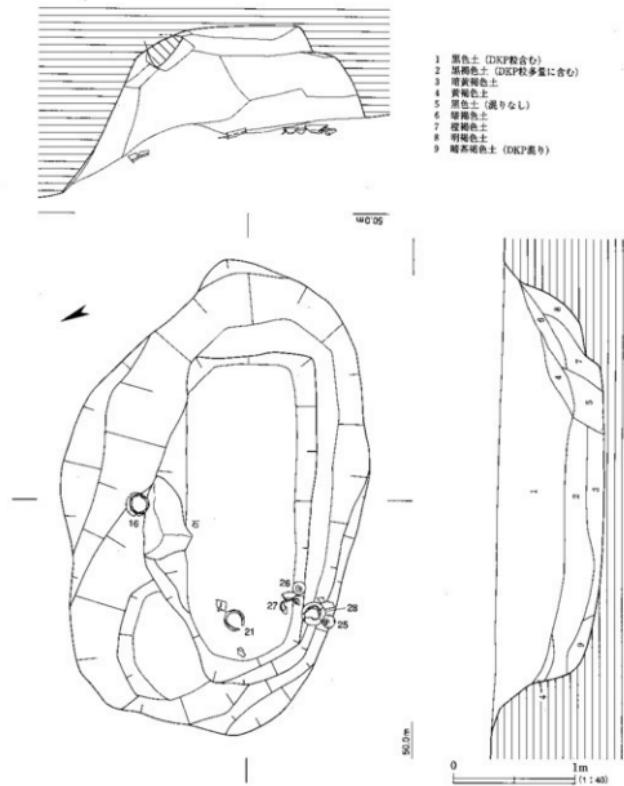


第7図 12号～15号土壤墓遺構図

0.76mを測り、東小口側が広い。頭位は東と推定される。

遺物は、土壤墓上の検出面西側から壺16・17・18、甕19・20・21・22、鼓形器台27・28・29、高环23・24、低脚环25・26など多量の供献土器が出土した。

**17号土壤墓** 16号土壤墓の約1.3m南側に並行して位置し、主軸は1号溝と直交する。墓壙の平面形はやや歪で三日月状を呈する。掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ3.35m・幅1.70m・深さ0.30m、下段が長さ

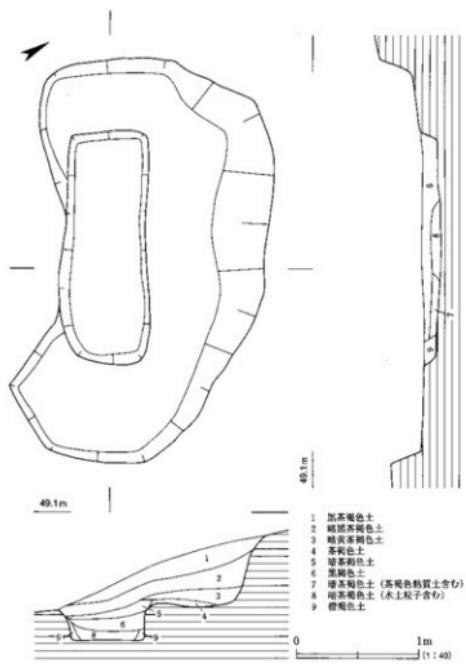


第8図 16号土壤墓造構図

1.94m・幅0.73m・深さ0.16mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.46mを測る。底面の西小口幅0.54m・東小口幅0.52mを測り、西小口側が広い。頭位は西側と考えられる。遺物は出土しなかった。

**18号土壤墓** 17号土壤墓の約1m南側に並行して位置し、主軸は1号溝と直交する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ3.87m・幅1.84m・深さ0.58m、下段が長さ2.30m・幅0.74m・深さ0.17mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.75mを測り、西小口側が3cm高い。底面には両小口に小口板を固定するための溝が掘られていた。溝の長さは西側1.17m・東側0.86mを測り、西側が長い。頭位は北西側と推測される。この小口板痕跡と埋土の堆積状況から、内法で長さ2.39m・幅0.75m程度の木棺が納められていたと推定される。遺物は出土しなかった。

**19号土壤墓** 3号溝のほぼ中央に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ0.97m・幅0.81m・深さ0.08m、下段が長さ0.87m・幅0.38m・深さ0.12mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.20mを測る。底面の西小口幅0.20m・東小口幅0.29mだが、底面は西小口側が3cm高いため頭位は西側と推定される。遺物は出土しなかった。



第9図 17号土壤墓遺構図

るための溝が掘られていた。溝の長さは西側0.68m・東側0.47mを測り、西側が長い。頭位は西側と推定される。この小口板痕跡と埋土の堆積状況から、内法で長さ1.62m・幅0.53m程度の木棺が納められていたと推定される。遺物は出土しなかった。

**22号土壤墓** 21号土壤墓の約2.5m南西側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形だがやや歪に北側に膨らむ。掘り方規模は長さ2.54m・幅1.62m、検出面から墓壙底までの深さは0.71mを測る。底面には、西小口に小口板を固定するための溝が掘られていた。溝の長さは0.74mを測り、頭位は北西側と推定される。この小口板・側板痕跡と埋土の堆積状況から、内法で長さ1.90m・幅0.54m程度の木棺が納められていたと推定される。遺物は出土しなかった。

**23号土壤墓** 22号土壤墓の約0.5m南側にはほぼ並行し近接して位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で掘り方規模は長さ2.05m・幅0.80m、検出面から墓壙底までの深さは0.62mを測る。底面には両小口に小口板を固定するための溝が掘られていた。溝の長さは北西側0.52m・南東側0.85mを測る。頭位は西側と推定される。この小口板痕跡と埋土の堆積状況から、内法で長さ1.66m・幅0.41m程度の木棺が納められていたと推定される。遺物は出土しなかった。

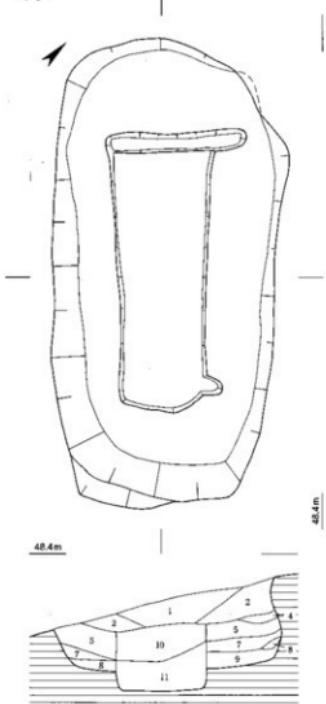
**24号土壤墓** 23号土壤墓の約1m南西側に位置する。墓壙の平面及び底面形は歪な隅丸長方形のため溝の可能性を考えたが、埋土、周囲の土壤墓との規模の比較等により土壤墓として捉えた。掘り方の規模は長さ1.99m・幅

**20号土壤墓** 19号土壤墓の東側、3号溝の東端に位置し、主軸を19号土壤墓とほぼ同じとする。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ1.55m・幅1.11m・深さ0.20m、下段が長さ1.37m・幅0.68m・深さ0.21mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.41mを測り、底面は西小口側が6cm高い。底面の西小口幅0.58m・東小口幅0.52mを測り、西小口側が広い。頭位は西側と推定される。

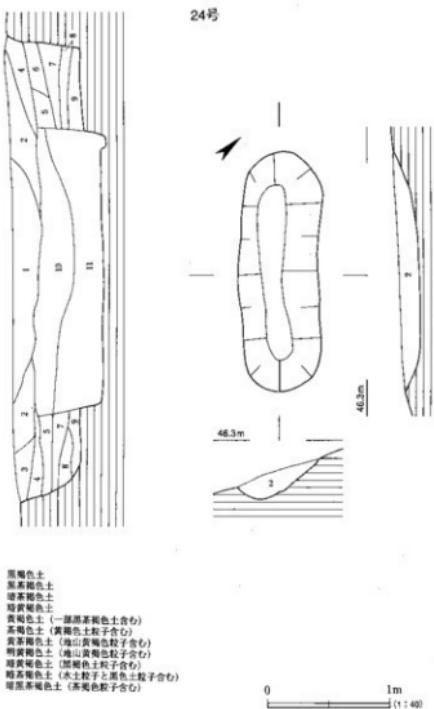
遺物は、土壤墓上の検出面西寄りで供獻状態の土器がまとめて出土した。壺30、鼓形器台33、高环31が供獻状態で出土し、そのすぐ西脇に供獻台と考えられるこぎり状に加工した石板が出土した。他に、低脚32、磨・敲石S4が出土している。

**21号土壤墓** 20号土壤墓・3号溝の約2m南側に並行して位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ2.70m・幅1.46m・深さ0.25m、下段が長さ1.93m・幅0.62m・深さ0.10mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.35mであった。底面には両小口に小口板を固定するための溝が掘られていた。溝の長さは0.74mを測り、頭位は西側と推定される。この小口板・側板痕跡と埋土の堆積状況から、内法で長さ1.90m・幅0.54m程度の木棺が納められていたと推定される。遺物は出土しなかった。

18号



24号



第10図 18号・24号土塚墓遺構図

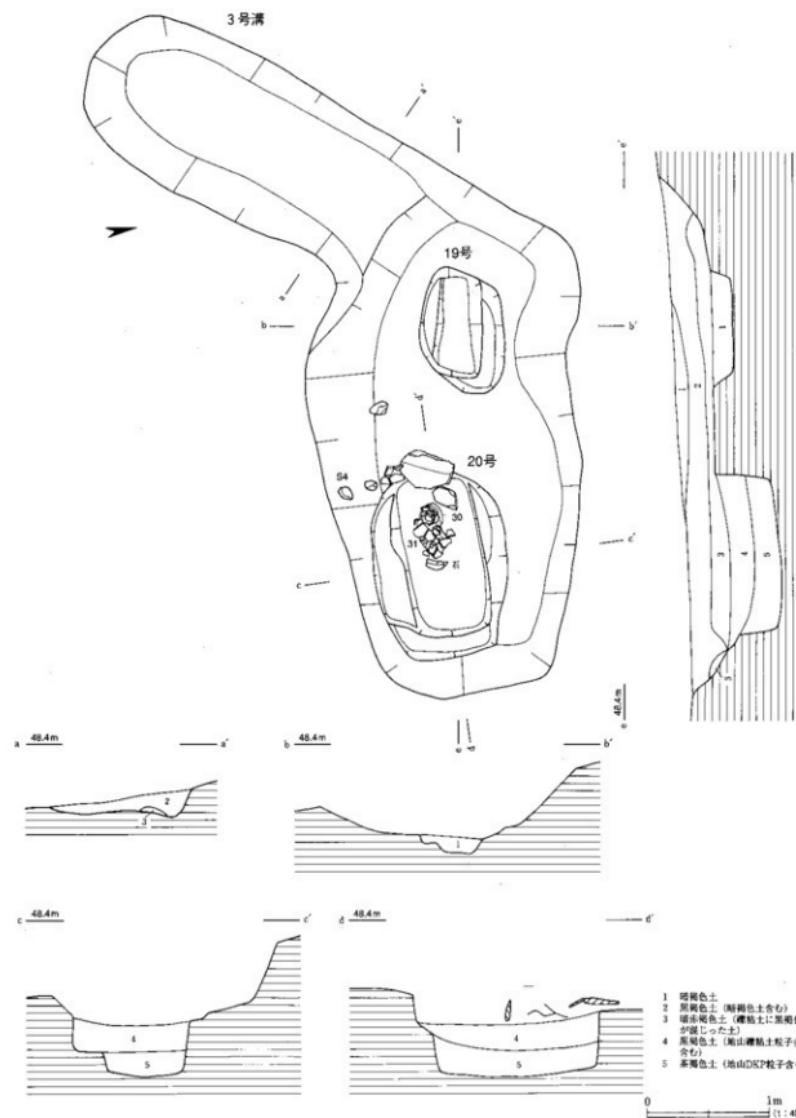
0.67m、検出面から墓壙底までの深さは0.18mを測る。底面の西小口幅0.23m・東小口幅0.21mを測る。底面は西小口側が8cm高い。頭位は不明。遺物は出土しなかった。

**25号土塚墓** 24号土塚墓の約2m北西側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方の規模は長さ2.05m・幅0.70m、検出面から墓壙底までの深さは0.14mを測る。底面はほぼ水平である。底面の西小口幅0.28m・東小口幅0.32mを測る。頭位は不明。遺物は出土しなかった。

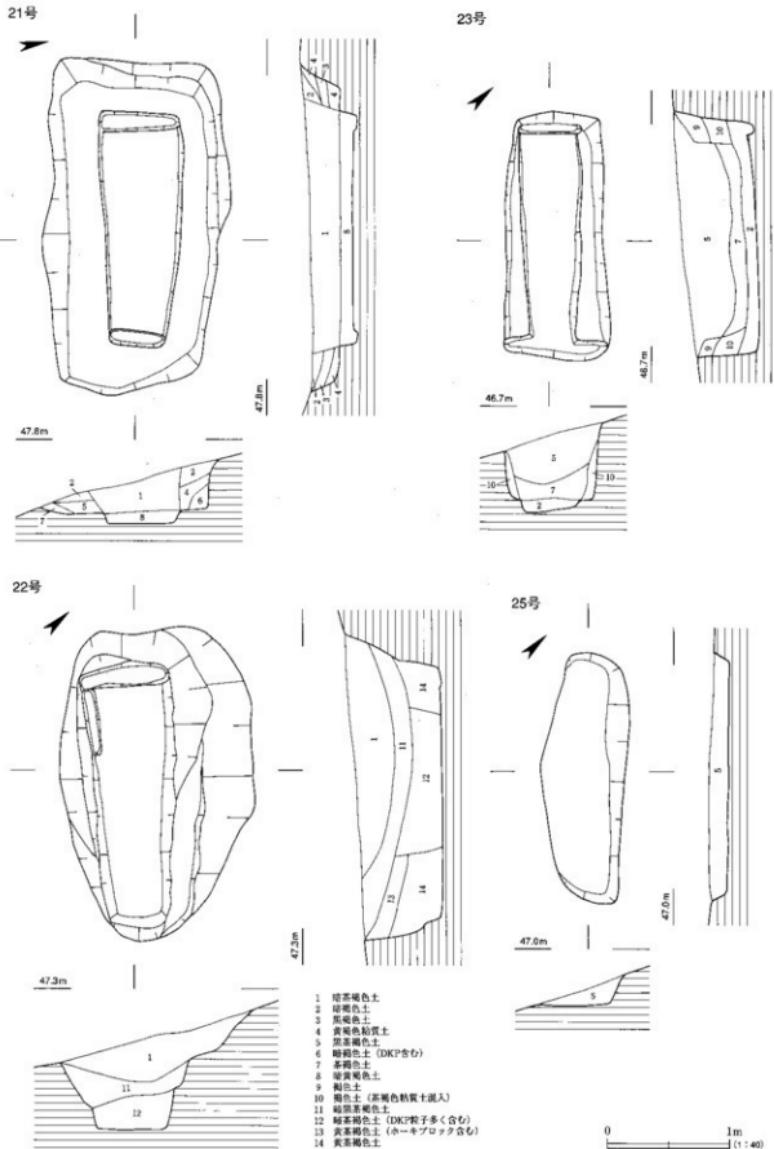
**26号土塚墓** 25号土塚墓の約0.2m北西側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方の規模は長さ2.27m・幅0.80m、検出面からの墓壙底までの深さは0.25mを測る。底面の西小口幅0.53m・東小口幅0.40mを測る。底面は西小口側が15cm高い。頭位は西側と推定される。遺物は出土しなかった。

**27号土塚墓** 26号土塚墓の約0.2m北西側に位置する。墓壙の平面形は隅丸長方形で、掘り方の規模は長さ2.17m・幅0.59m、検出面から墓壙底までの深さ0.12mを測る。底面の西小口幅0.40m・東小口幅0.38mを測る。底面は東側が3cm高い。頭位は不明。遺物は出土しなかった。

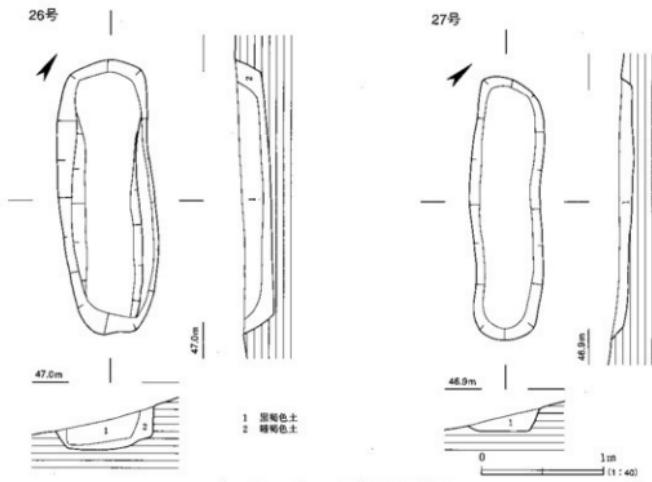
**土器棺墓** 1号土塚墓の南東隣に位置する土器棺墓である。土器棺墓の主軸は、ほぼ南北方向である。大型の甕34を棺身とし、棺蓋は遺存していない。棺の残存長は0.47mではほぼ完形であった。墓壙の平面形は梢円形を



第11図 19号・20号土壤基、3号溝遺構図



第12図 21号～23号・25号土壤墓遺構図



第13図 26号・27号土壤墓遺構図

呈する。墓壙掘り方規模は長さ0.64m・幅0.53m・深さ0.24mを測る。甕の口縁部を水平面に対し25°上方向に向けた状態で埋置していた。棺身は焼成後底部を穿孔しており、穿孔部分は片側に寄っており、設置面に位置する。副葬品、人骨等は出土しなかった。

**1号溝** 16号土壤墓の西側で、土壤墓群のほぼ中央に位置し、南北方向に延びる。断面形はならかなU字形で、北側ほど浅くなる。掘り方の規模は長さ2.52m・幅1.42m、検出面からの深さは0.76mを測り、底面はほぼ平坦である。溝の主軸は、16号～18号土壤墓の主軸とほぼ直交する。

遺物は溝底の中央から南側にかけて甕36・38・39、台付甕37、埋土中層より甕35が出土した。

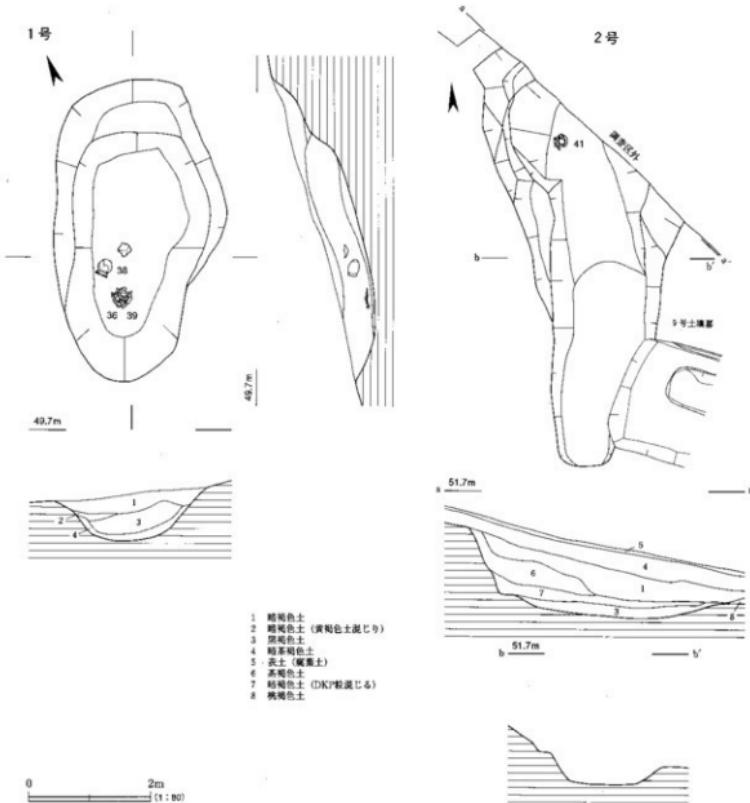
**2号溝** 9号土壤墓の西側に位置し、調査区際のため溝の南側一部を検出した。9号土壤墓より南東側の土壤墓を区画し、さらに北側に延びる。断面形はU字形で、掘り方の規模は検出できた範囲で長さ7.0m・幅0.9~2.7m、検出面からの深さは最大で1.2mを測り、底面は平坦である。溝の南端を9号土壤墓が切っている。溝の主軸は、9号～15号土壤墓の主軸とほぼ直交する。

遺物は埋土上層から鼓形器台41が正位で、埋土中から甕40が出土した。

**3号溝** 21号土壤墓の北側に位置し、ほぼ東西方向に延びる。断面形は浅いU字形で、底面はほぼ平坦で西側半分は浅い。平面形は中央付近で南向きに折れ、21号土壤墓を囲むような形になる。検出面の規模は長さ7.0m・幅1.3~2.1m、深さ0.3mを測る。溝の東側半分は幅が広く、溝中央部に19号土壤墓、東端に20号土壤墓が造られる。遺物は出土しなかった。

#### 古墳群

調査の結果、土壤墓群と同一丘陵尾根筋を南へやや下った斜面（標高40~45m付近）上に、方墳4基を検出した。方墳の規模は、周溝を含めた一辺が3.0~12.5mを測り、最高所に位置する1号墳が最大で、西端に位置する4号墳が最小である。方墳の埴丘はすべて盛土せずに斜面の高い側を削り出し平坦にしている。周溝は、斜面の高い側をコの字状に区画するものである。また2号～4号墳は周溝の一辺を重ねており、周溝の北辺を東西方



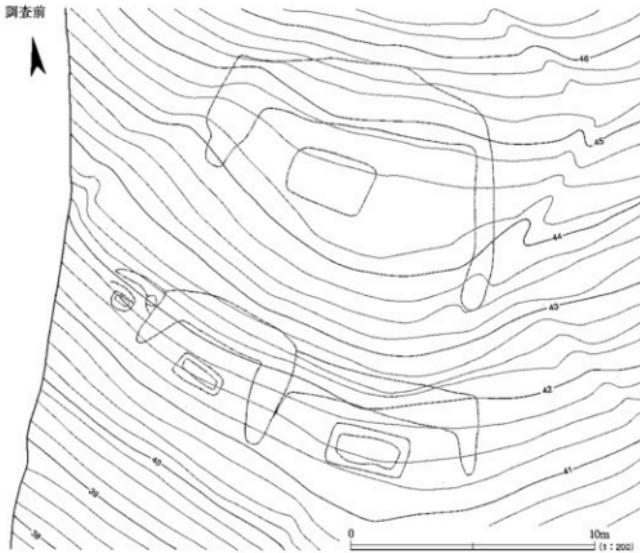
第14図 1号・2号溝構造図

向に據て配置されている。古墳群中最大規模を測る1号墳は、土壤群南端に位置する23号土壤墓の4m南に位置しており、土壤群と古墳群は非常に近接する。主体部は、4基すべて遺存し、1号墳の主体部は堅穴式石槨状を呈する石棺墓1基、2号墳は箱式石棺墓1基、3号・4号墳は木棺墓と推定される主体部を各1基検出した。主体部は、すべて等高線に並行し東西方向に主軸をとる。主体部以外の埋葬施設は、4号墳周溝から土器棺墓を1基検出した。人骨は、1号墳で3体、2号墳で1体遺存していた。

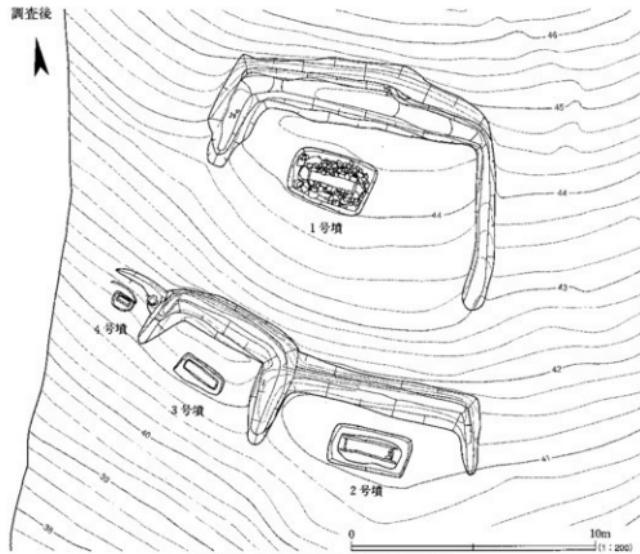
#### 1号墳

**墳丘** 調査区の標高43~45mの斜面に位置する方墳で、今回調査した古墳群の中で一番高い位置に立地する。調査前は、1号・2号墳の墳丘の平坦部分が認められていた。墳丘は、斜面を削り出して造成する。調査後の周溝を含めた規模は、東西12.5m・南北9.0mで、古墳群中最大規模を測る。

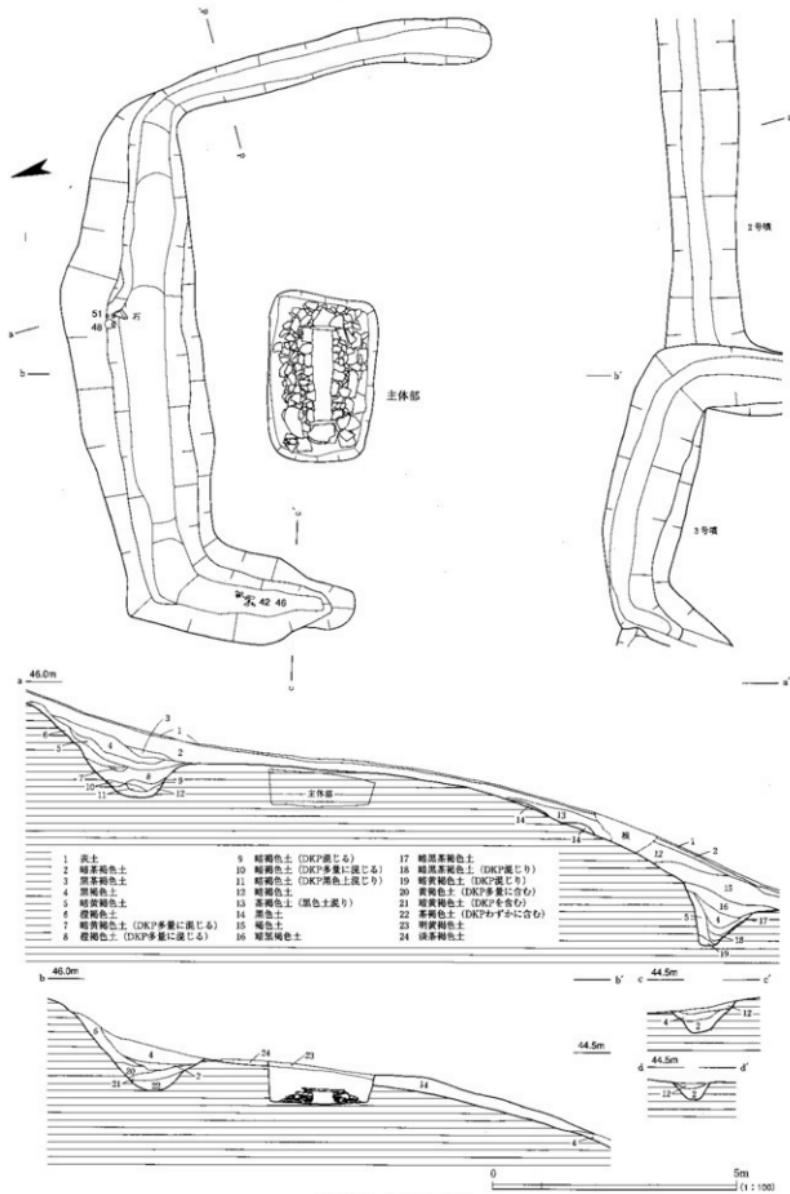
調査前



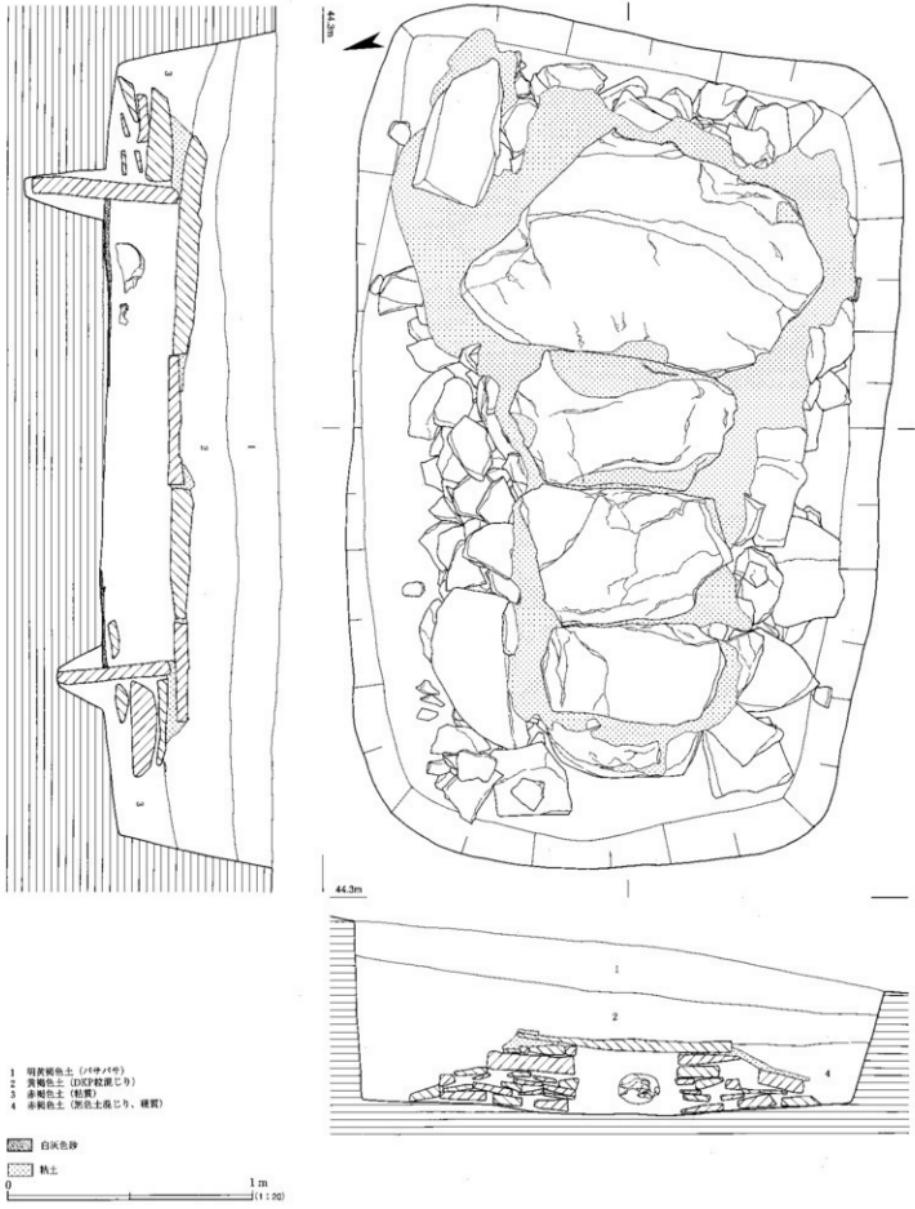
調査後



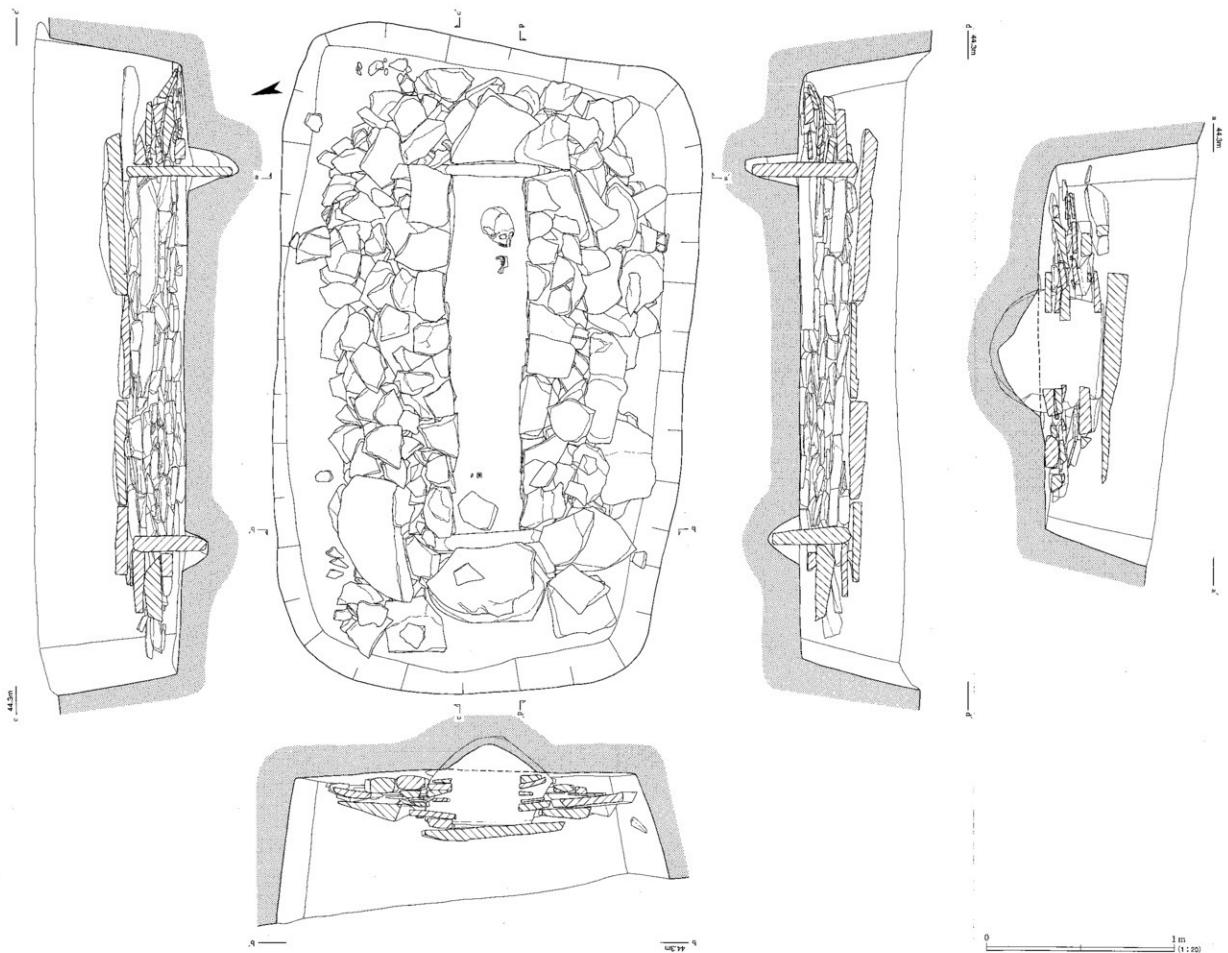
第15図 古墳群調査前・後地形測量図



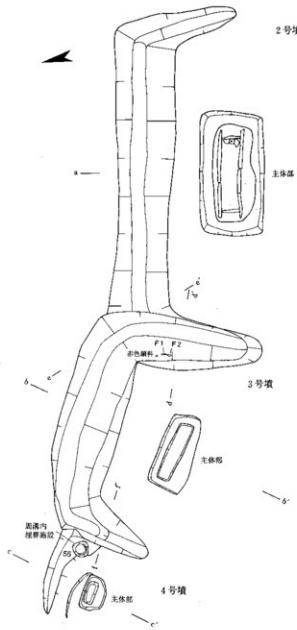
第16図 I号墳遺構図



第17図 1号墳主体部遺構図 1

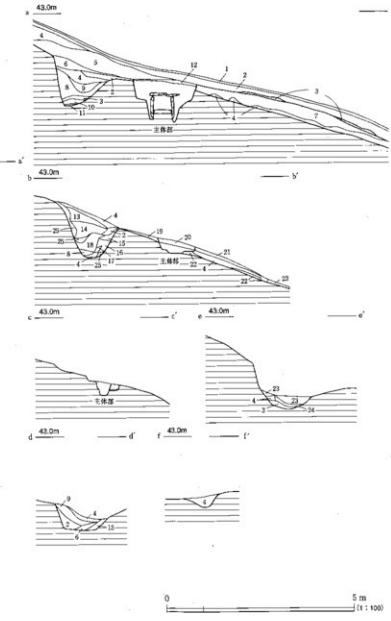


第18图 1号填土主体部遗物图 2



2号坑

1. 黄土
2. 黄褐色土
3. 黑色土
4. 灰褐色土
5. 灰色土
6. 灰褐色土
7. 黄色土
8. 黄褐色土
9. 红褐色土 (深褐色土含む)
10. 黄褐色土 (C2層含む)
11. 明黄色土
12. 明黄色土 (主体部埋土)
13. 黄褐色土
14. 黑褐色土 (深褐色土含む)
15. 黄褐色土
16. 灰褐色粘土
17. 灰褐色粘土 (深褐色土が混じる)
18. 黄褐色土 (深褐色土が混じる)
19. 褐色土 (深褐色土が混じる)
20. 黄褐色土 (深褐色土)
21. 塔状土 (深褐色土)
22. 灰褐色土 (灰褐色土)
23. 灰褐色土
24. 黑褐色土 (暗褐色土)
25. 暗褐色土



第19図 2号～4号埴造構図

**周溝** 周溝は、斜面の高い側をコの字状に区画する。幅は尾根側が最大で2.75mを測り、東辺より北・西辺が広くなっている。断面は、V字状を呈する。検出面からの深さは尾根側で最大1.10mを測り、斜面側は徐々に浅くなる。

**主体部** 主体部は、埴丘中央よりやや北西寄りに、堅穴式石棺と箱式石棺との折衷様式ともいえる特異な構築法による石棺を1基検出した。主軸方向はN105°Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方規模は長さ3.44m・幅2.18m、検出面からの深さは最も深いところで0.72mを測る。

蓋石は大型の板石を4枚使用し、その合わせ目に白色粘土を目張りとし隙間を埋めている。東端部の蓋石は、1.5m×0.9mの比較的大型の板石を使用している。

墓壙底には、両小口石を固定するための溝が掘られていた。溝は、東側長さ0.82m・深さ0.36m、西側長さ0.61m・深さ0.18mを測る。そして、東側縦43cm×横67cm・西側縦60cm×横65cmの偏平な板石を立て据える。両小口石の裏側には控え積みを行う。ここまででは箱式石棺墓と同様な構築法であるが、両側壁は偏平な厚さ5~10cmの板石を北壁5~7段・南壁6~7段小口積みし、さらに控え積みを行う。両側壁は、両小口に挟まれる。側壁は、棺中央より東側を比較的大型の板石で隙間無く積み上げている。壁面は揃っておらず僅かながら持ち送り気味に内側にせりだし狭くなる。この段階での石上面は揃っておらず水平でないため、白灰色粘土を用いて石棺上面を水平にする。そして、小口積みした壁面の板石間の隙間に粘土を埋めて目張りをし、棺内の四壁表面に白灰色粘土を薄く貼る。棺の規模は、内法で長さ1.90m・中央幅0.37m・深さ0.26mを測る。両小口幅は、東小口0.38m・西小口0.39mを測る。

棺内の両小口石及び両側壁内面には、赤色顔料の塗布が顕著である。使用石材は、全て板状節理を持つ板石である。両小口側の棺床には白灰色砂が厚い部分で約3cmほど残存していた。人骨は、東小口側で30代（壮年中期）女性（第1被葬者）の頭蓋骨1体と、その北側で10歳前後の女性（第2被葬者）の歯牙1ヶ、さらに西小口側で幅10センチ四方の石枕状の板石とともに性別・年齢不詳（第3被葬者）の歯牙1ヶの、合計3体分の人骨を確認した。出土人骨数および棺の規模から少なくとも1回の追葬が推定されるが、石棺検出時の墓壙埋土平断面観察では追葬時の掘り込みは確認できなかった。

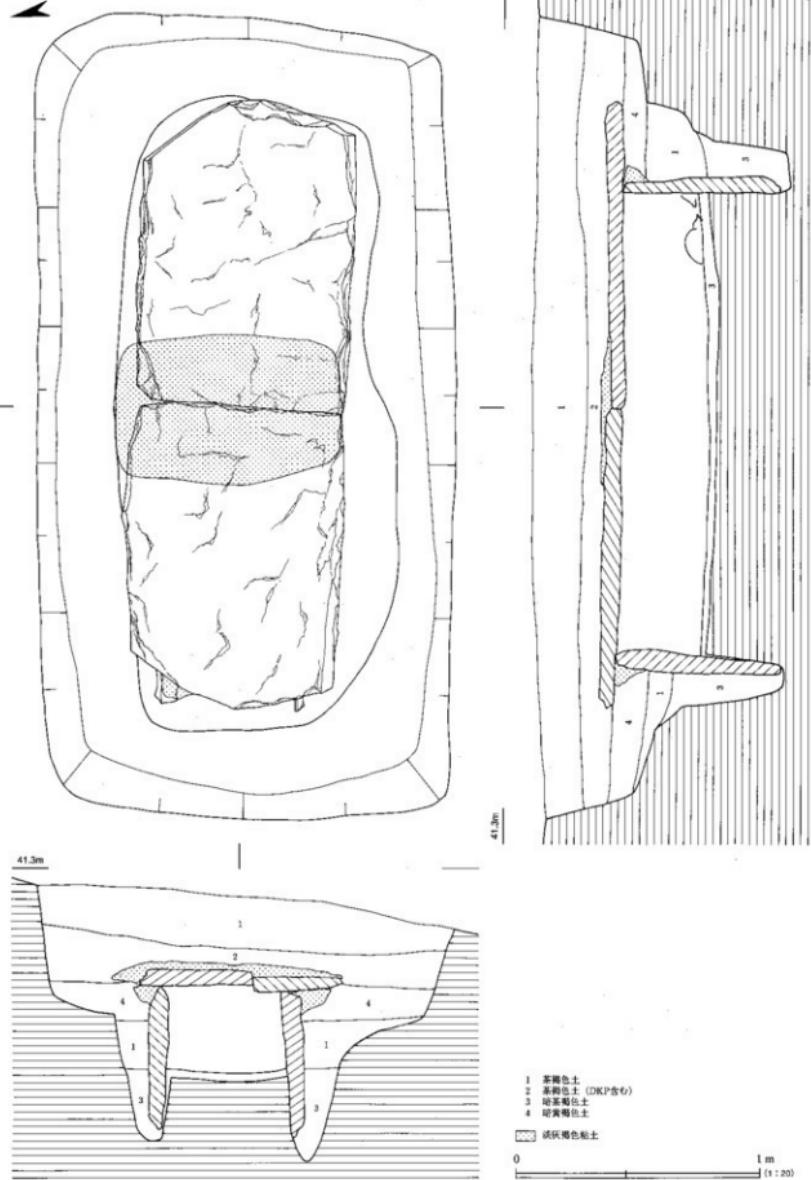
**副葬品** 西小口の石枕状板石付近の棺床からガラス小玉J1が出土した。また、2号墳の西側周溝底から鉄鎧1点F1、鉄斧1点F2が出土した。F1の約20cm北側に赤色顔料が遺存しており、F1・2と共に追葬時に棺内より排出されたと推測される。

**出土遺物** 周溝西側の周溝底から壺42、周溝埋土中から壺44・45・46、大型壺43、高环49が集中して出土した。また、周溝北側周溝底から0.55m浮いた状態で壺48・低脚环51が出土し、周溝がある程度埋没した時期に置かれ、供献状態と考えられる。周溝検出面から壺47・低脚环50が出土した。

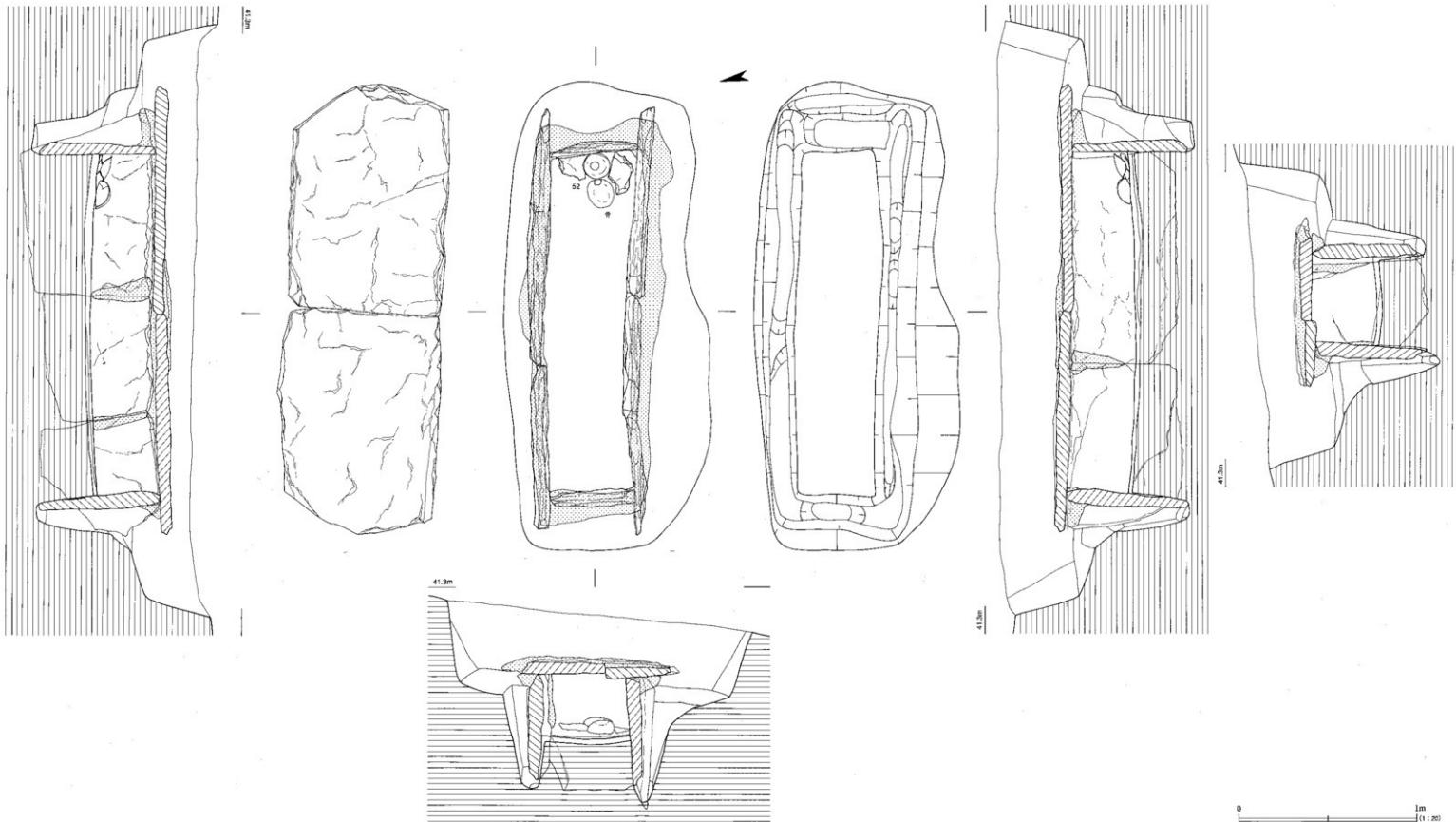
## 2号墳

**埴丘** 標高40~42mの斜面上、1号墳の南側約3m離れて位置する方墳である。古墳の主軸は1号墳に従っており、周溝の東辺も1号墳の東辺の延長線上にある。埴丘の南側約3分の1ほど旧地表面である黒褐色層が僅かに遺存していた。埴丘は、斜面の高い側を削り出している。調査後の周溝を含めた規模は東西9.3m・南北6.2mを測る。周溝の西側を3号墳に切られることを平・断面観察により確認した。

**周溝** 周溝は、斜面の高い側をコの字状に区画する。東辺は、1号墳の東辺延長上に據える。幅は0.62~1.58mで東・西側より北側が広くなっている。検出面からの深さは尾根側で最大1.30mを測り、斜面側は徐々に浅くなる。

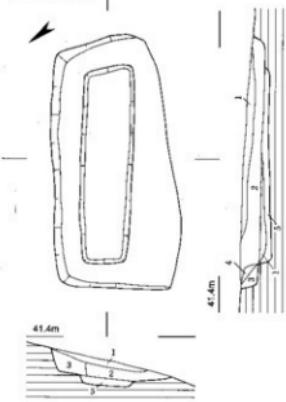


第20図 2号墳主体部遺構図1

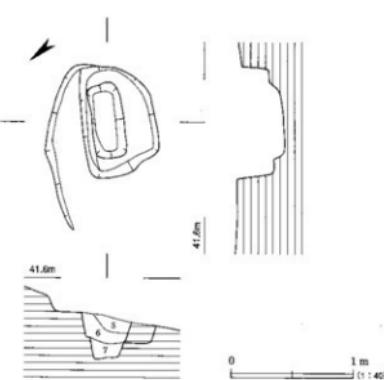


第21图 2号填主体部造構図2

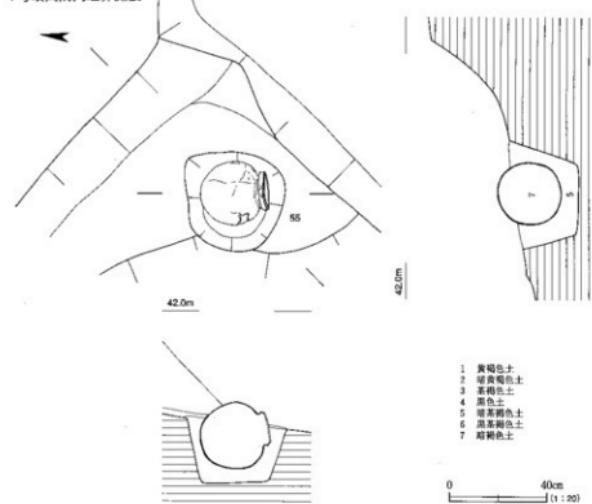
3号墳主体部



4号墳主体部



4号墳周溝内埋葬施設



第22図 3号・4号墳主体部、4号墳周溝内埋葬施設遺構図

**主体部** 主体部は、墳丘の中央部よりやや北寄りに位置し、主軸方向をN103°Eにとる箱式石棺墓1基を検出した。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方は2段になっており規模は上段が長さ3.30m・幅1.71m・深さ0.48m、下段が長さ2.59m・幅1.11m・深さ0.26mを測る。検出面からの深さは0.76mを測る。墓壙底には、両小口側と両側壁側に、石棺材を立てるための溝を掘り巡らしている。石棺は、両小口に各1枚ずつ板石を立て、これを挟み込むかたちで北側側壁2枚、南側側壁3枚の板石を立て据える。この段階で両小口石および両側石の最高部はほぼ水平に揃い、小口石と側石の隙間、側石間の隙間を埋めるため粘土で内側から目張りをし、さらに

各石の裏側に粘土を貼って蓋石との接地面を平滑にしている。蓋石は、合わせ目を直線的に加工した板石を2枚置き、合わせ目に粘土を敷きつめ目張りを施す。石棺の規模は、内法で長さ1.91m・幅0.49m・深さ0.37mを測る。棺床は、平均して約3cmほど暗茶褐色土を敷いて整地する。東小口側には、土器枕として鼓形器台が転用されており、枕の左右に10cm角の板石が1枚ずつ置かれる。棺内に赤色顔料の痕跡は認められなかった。

東小口側で40歳前後（壯年後期）の女性の頭蓋骨が出土した。副葬品は出土しなかった。

**出土遺物** 主体部棺内の土器枕として鼓形器台52、周溝NW区上層から甕53、高环54が出土した。

### 3号墳

**墳丘** 標高40~42mの斜面上、1号墳の南西側約2.5m離れて位置する方墳で、東側は2号墳の周溝を切る。西側は4号墳と接する。周溝を含めた規模は東西6.6m・南北6.6mを測る。墳丘は、斜面高い側を削り出している。周溝 周溝は、斜面の高い側をコの字状に区画する。東辺は2号墳の西辺と切り合い、2号墳の方が深い。幅は、0.80~1.65mを測る。検出面からの深さは尾根側で最大1.15mを測り、斜面側は徐々に浅くなる。

**主体部** 主体部は、墳丘のほぼ中央に位置する。主軸方向はN127°Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形だが、斜面の低いほうは削平されやや歪になる。掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ2.07m・幅0.98m・深さ0.16m、下段が長さ1.62m・幅0.44m・深さ0.06mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.22mを測る。墓壙掘り方から、木棺墓と推定される。人骨、副葬品等は出土しなかった。

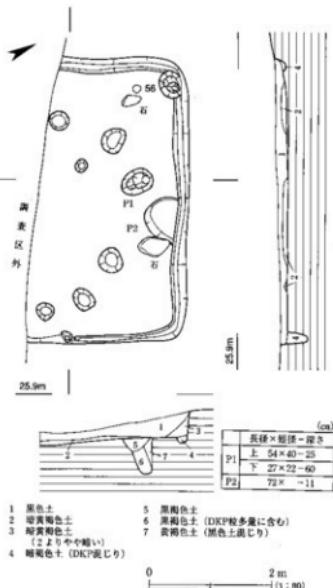
### 4号墳

**墳丘** 標高41~42mの斜面上、3号墳の西側に接する方墳。墳丘は、斜面の高い側を削り出している。規模は、周溝を含めて東西約3m・南北2.6mを測る。

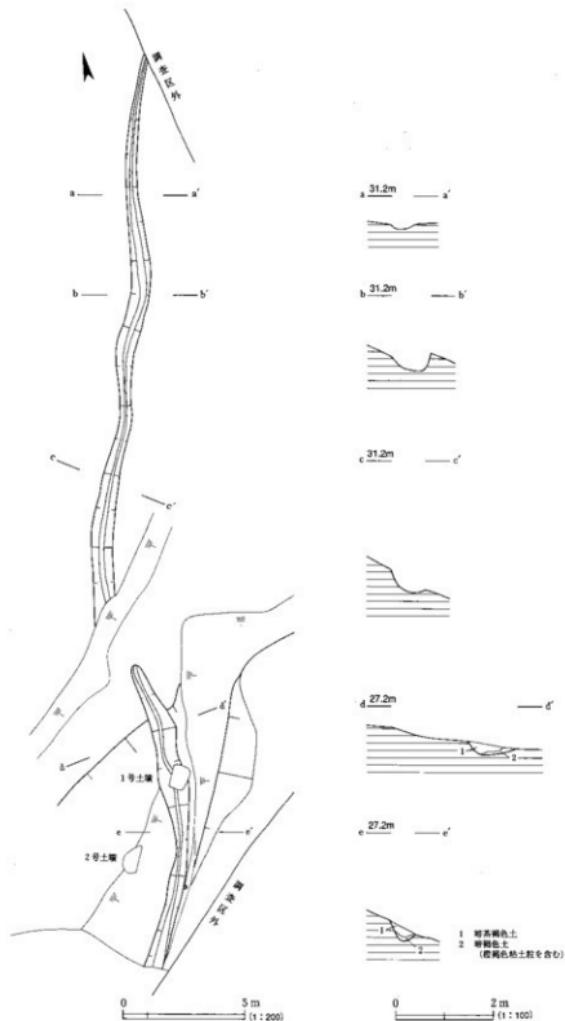
**周溝** 周溝は、斜面の高い側に東西に延びる。幅は3号墳の周溝と接する付近で約1mを測り、西側に向かって徐々に狭くなる。残存する深さは最大で0.2mを測る。墳丘側の立ち上がりは削平を受け消滅している。3号墳の西辺に重なる部分の切り合い関係は、断面観察では確認できなかった。

**主体部** 主体部は、墳丘のほぼ中央に位置する。主軸方向はN130°Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ0.9m・幅0.40m・深さ0.20m、下段が長さ0.73m・幅0.24m・深さ0.13mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.33mであった。また、主体部の北側は斜面をカットして平坦面をつくっている。墓壙掘り方から、土塼墓と推定される。人骨、副葬品等は出土しなかった。

**周溝内埋葬施設** 東側の周溝底に位置する土器棺墓である。主軸方向は、周溝に並行ほぼ東西方向である。甕55を棺身とし、棺蓋は遺存していない。棺の残存長は0.31mで、ほぼ完形であった。墓壙掘り方は直角方形で、規模は一边0.45mで、検出面からの深さは0.28mを測る。甕のII縁部を水平面に対して12°上方に向かって立たせた状態で埋置していた。人骨、副葬品等は出土しなかった。

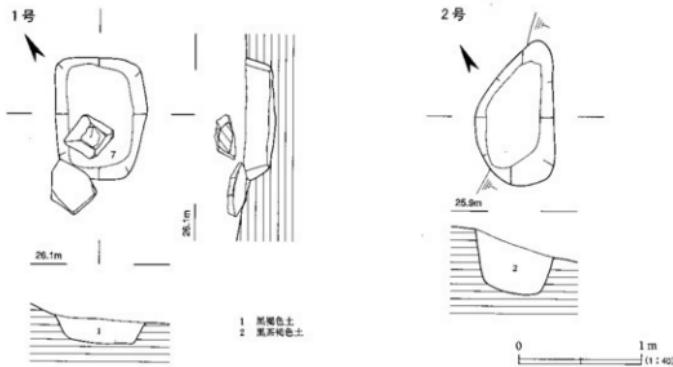


第23図 穫穴式住居遺構図



第24図 溝状遺構遺構図

**堅穴式住居** 調査区の南端の緩斜面上に位置する。南側約2分の1は、調査区外のため未検出。平面形は隅丸方形と推定される。床面の規模は東西長4.44m・南北長2.40m、床面積9.54m<sup>2</sup>を測る。周壁溝は12~18cmの幅で遺存しており、おそらく全周していったと考えられる。壁高は最も高い北側で45cmあった。床面中央より東寄りで主柱と考えられるP1、P1の北東側の壁沿いにP2が検出された。中央ピットはない。



第25図 1号・2号土壤遺構図

遺物は、西寄りの床面直上から須恵器壺蓋56が出土した。

**ピット列** 調査区の南端の緩斜面上に位置する。斜面に平行し、東西方向を主軸とする。竪穴式住居と切り合い住居より新しい。中央のピットは12cm、西端のピットは9cmの木材とみられる痕跡を確認した。調査区のため住居も含めて南側が未検出であり性格は不明であるが、柵列あるいは掘立柱建物の可能性が推測される。

**溝状遺構** 調査区の南東端の斜面上に位置する。溝は斜面をなだらかに下りほぼ南北方向に延び、さらに調査区外を南北に延びる。中央部は削平により遺存しないが、復元すると長さ37.5m・幅0.4~1.5m、検出面からの深さ0.35mである。南側へ行くほど幅が広くなるが深さはほぼ一定で、調査区の南側・北側へさらに延びる。遺物は出土しなかった。

**1号土壤** 調査区の南東部の緩斜面上に位置し、主軸方向はN33°Eである。平面形は隅丸長方形で、掘り方規模は長さ1.0m・幅0.75m、検出面からの深さ0.19mを測る。溝状遺構との切り合いは1号土壤の方が新しい。

遺物は、土壤中央からやや南寄りの検出面より五輪塔火輪7、土壤南西隅の検出面より40×30cm大の板石が遺存しており、土壤の性格としては中・近世墓の可能性がある。

**2号土壤** 1号土壤の南西側に約3m離れて位置し、主軸方向はN30°Eである。平面形は歪な菱形で、掘り方規模は長さ1.08m・幅0.64m、検出面からの深さ0.40mを測る。埋土は黒色土の自然堆積であったため性格不明の土壤とした。遺物は出土しなかった。

## 2 出土遺物

遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・鉄器・ガラス小玉・石製品・五輪塔・錢貨が出土した。以下、遺物の説明は、鉄器・ガラス小玉を除き表に一括した。

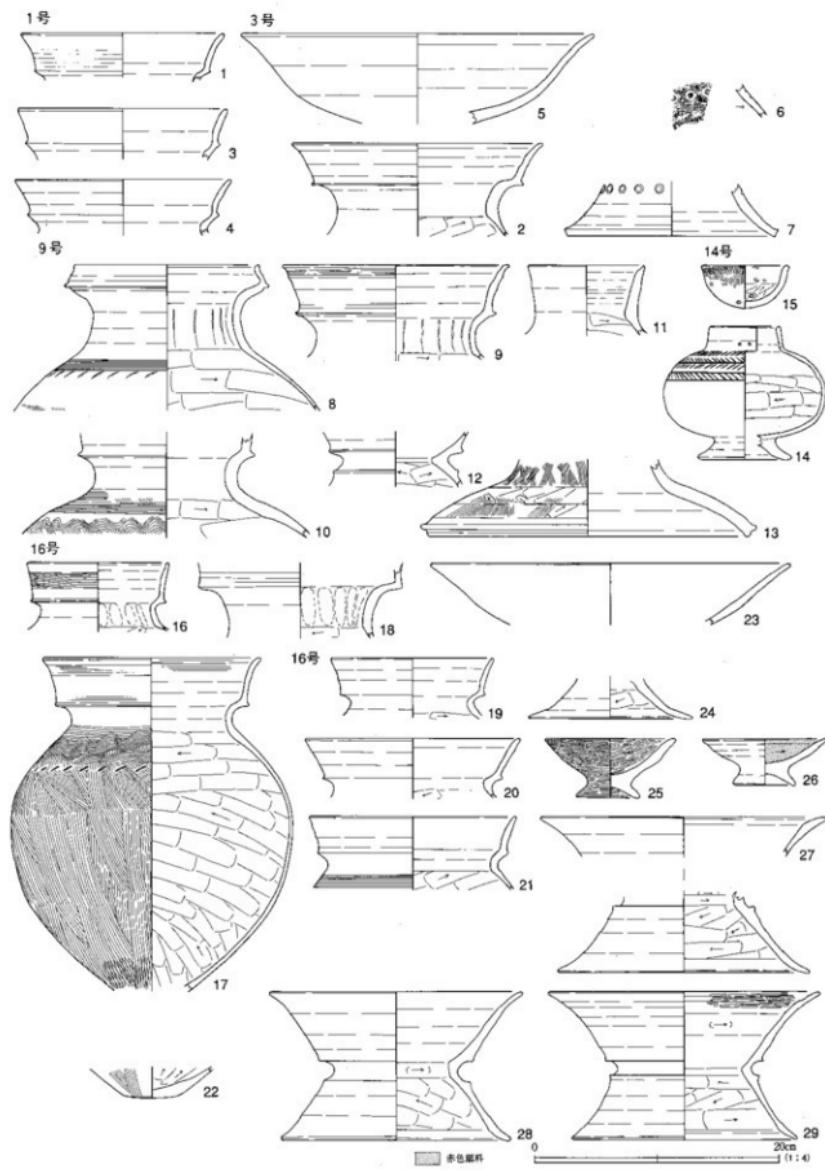
器種は、弥生土器・土師器以外についてはそれぞれ須恵器・土師質土器と付している。須恵器は器壁断面を墨で塗りつぶして図示した。出土位置を遺構平面図中に図示したものは、遺物No.をゴシック体で表す。

## 土壤基盤

(法量( )は推定値)

| 出土位置           | No. | 器種                      | 法量(cm)                       | 形<br>態   | 手<br>法  | 黏土<br>塊成<br>色調<br>濃度                              |
|----------------|-----|-------------------------|------------------------------|--|---|---|
| 1号土壤基盤東側       | 1   | 甕                       | 口径 16.5                      | 口縁部は上方へ聞く二重口縁で、口縁部は丸くおさめる。肩部はヨコナデにより引き出される。  | 口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面横幅沈線を残す。  | 1~3mmの大砂粒を含む。塊成普通。暗褐色。口縁~肩部1/3。                   |
| 3号土壤基盤西側       | 2   | 甕                       | 口径 (20.5)                    | 口縁部は上方へわざかにのびる二重口縁で、口縁部はヨコナデにより引き出される。   | 口縁部内外面ヨコナデ。肩部以下内面右方向へのラケギリ。   | 1~2mmの大砂粒を含む。塊成良好。黄褐色。口縁部1/4。                     |
|                | 3   | 甕                       | 口径 17.0                      | 口縁部は上方へ聞く二重口縁で、口縁部はヨコナデにより引き出される。4の屈曲部の様は説い。   | 口縁部内外面ヨコナデ。3は磨滅著しく單位不明瞭、4は单位明瞭。   | 1~2mmの大砂粒を含む。塊成普通。黄褐色。口縁部1/2。                     |
|                | 4   |                         | 口径 (17.6)                    |  |   | 1~2mmの大砂粒を含む。塊成普通。黄褐色。口縁部1/3。                     |
|                | 5   | 高环                      | 口径 (28.0)                    | 肩部は塊状で、口縁部は外反し底部でさらに外へ反る。  | 口縁部内外面ヨコナデ。   | 1~2mmの大砂粒を多く含む。塊成普通。黄褐色。环部1/3。                    |
| 周辺             | 6   | 甕                       |                              | 肩部外側に竹管文、瘤原体による刺み目がめぐる。  | 内面右方向へのラケギリ。  | 1~2mmの大砂粒を多く含む。塊成普通。橙色。体部右、他小片あるが実測不可能。           |
|                | 7   | 圓台                      | 腰径 (17.1)                    | ハの字状に聞く断面。外面竹管文を一条劃す。  | 内外面ヨコナデ。  | 2mm以下の砂粒を含む。塊成普通。褐褐色。都塙部1/6、6と同一個体の可能性あり。         |
|                | 8   | 甕                       | 口径 15.0                      | 口縁部は短く内横する二重口縁で、屈曲部の様はわずかに下垂する。肩部は内厚で底部は強く外反して上方へ聞く。屈曲部の様は穢い。肩部外面瘤原体による刻み目。                                      | 口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面横幅沈線の条痕がある。頭部外面ヨコナデ、内面凹り目。肩部外面平行沈線部。底部以下内面右方向へのラケギリ。                  | 1~2mmの大砂粒を比較的多く含む。塊成普通。褐色。口縁~肩部ほぼ完存。              |
| 検出面            | 9   |                         | 口径 18.3                      | 口縁部外反する二重口縁で、底部は角張りや内側に面をなす。屈曲部の様は穢い。  | 口縁部外面ヨコナデ、外面横幅沈線部の条痕みえる。頭部内面凹り目。頭部以下内面右方向へのラケギリ。                                      | 1mmの大砂粒を含む。茎目立つ。塊成普通。褐色。口縁~肩部1/2。                 |
|                | 10  |                         |                              | 二重口縁。屈曲部はヨコナデにより引き出される。  | 肩部外側右方向へのハケメ後平行沈線、波状文を残す。   | 5mm以下の砂粒を含む。塊成普通。淡褐色。頭~肩部1/3。                     |
|                | 11  |                         | 口径 (9.4)                     | やや外反する口縁部。口縁部はつまみ出るように丸くおさめる。肩部内面凹面をなす。  | 口縁部内外面ヨコナデ、内面ケズりナカダ。脚部部外面ヨコナデ、内面ヘラケギリ。  | 3mm以下の砂粒を含む。塊成普通。褐色。口縁~肩部1/6。                     |
|                | 12  | 較形<br>器<br>台            |                              |  | 上台部外面ヨコナデ、内面ケズりナカダ。脚部部外面ヨコナデ、内面ヘラケギリ。   | 1mmの大砂粒を含む。黒色粒子・黃母含有。塊成普通。赤褐色。脚部1/3。              |
| 13号土壤基盤南東側2m付近 | 13  | 大型<br>器<br>台            | 腰径 26.2                      | 外方に開いた脚部。端部は口縫を残す。   | 外面部常に細い目のハケメ調整、ヘラケギリ残す。内面磨滅著しく脚部不明。   | 1~5mmの砂粒を多く含む。塊成普通。褐色。脚部1/2。                      |
| 14号土壤基盤南東側2m付近 | 14  | 台付甕<br>最大胸径<br>脚径<br>腰高 | (5.6)<br>13.2<br>7.6<br>11.0 | 内質気球に立ち上がる口縫は、対の円形穿孔がある。穿孔は脚から。口縫部は丸くおさめる。頭部からなる肩の肩部につきづき脚部は大きく盛る。体部疊葉型。底部にはハの字状に聞く脚つく。体部器部は非常に薄い。肩部外面に被杉文が残される。 | 体部磨滅著しい。  | 2mm以下の砂粒を含む。塊成普通。淡褐色。口縫部2/3欠損、脚部1/4欠損。            |
|                | 15  | 甕                       | 口径 6.9<br>蓋高 3.5             | 底部付近に2孔2対の穿孔有り。穿孔は両面から。  | 口縫部外面脚方向のヘラケギリ。   | 2mm以下の砂粒を含む。塊成普通。口縫部内外面脚付部。淡褐色。ほぼ完存。              |
| 16号土壤基盤検出面     | 16  | 注口<br>土器<br>甕           | 口径 (11.0)                    | 口縫部は直立する二重口縁で、口縫部は小さく角張る。屈曲部はヨコナデにより引き出され穢い。   | 口縫部外面横幅平行線後ナカ消し、頭部内面凹りナカダ。  | 1~3mmの大砂粒を含む。塊成普通。淡褐色。口縫~瓶部1/4。因化不可だが粘土の懸濁する把手あり。 |
|                | 17  | 甕                       | 口径 17.6<br>最大胸径<br>23.0      | 口縫部は外反する二重口縁で、底部は丸くおさめる。肩部の様はヨコナデにより引き出される。  | 口縫部外面ヨコナデ、貝殻貝類状のカキ目を残す。外此肩部貝類縫合による刻み目を残す。肩部底下垂直沈線・平行線文・波状文。体部外面脚方向のハケメ調整、内面左方向へのラケギリ。 | 3mm以下の砂粒を含む。塊成普通。体部外表面付着。淡褐色。口縫部1/2、脚部1/3。        |
|                | 18  |                         |                              | 垂直に立ち上がる二重口縫。  | 頭部内面指サエ。以下左方向へのラケギリ。  | 1~3mmの大砂粒を含む。塊成普通。淡褐色。頭部1/6。                      |

| 出土位置          | No. | 器種    | 法量 (cm)  | 形 動   | 手 法   | 胎土 塗成 色調 遺存度  |
|---------------|-----|-------|--|---|---|---|
| 16号土壤基<br>検出面 | 19  | 甕     | 口径 (13.2)                                      | 口縁部は上方へ聞く二重口縁で、口縁<br>端部は丸くおさめる。屈曲部はヨコナデ<br>によって引き出される。  | 口縁部内外面ヨコナデ。21の背部外面垂<br>脂状模様を残す。頸部内面19・21は右方向、<br>20は左方向へのラケギリ。  | 1～2mmの大砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。口縁～頸部1/3。                 |
|               | 20  |       | 口径 (17.5)                                      |   |   | 1mm以下の砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。口縁～頸部1/3。                  |
|               | 21  |       | 口径 16.8  |   |   | 1～2mmの大砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。口縁～頸部ほぼ完存。                |
| 検出面           | 22  |       |  | 底部は不明瞭な平坦面。   | 底部外面ハケメ調整、内面上方向へのラ<br>ケギリ。  | 1mm以下の砂粒を含む。焼成普通。外<br>面褐色、内面灰褐色。底部小片。               |
| 検出面           | 23  | 高 环   | 口径 29.3  | 口縁部は外反しながらゆるやかに開き、<br>端部は丸くおさめる。  | 内外面審著しく調整不規。  | 1～2mmの大砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。環部1/2。                    |
| 検出面           | 24  |       | 脚径 13.1  | ハの字形に開き、端部はヨコナデにより<br>さらに外反する。  | 底部外面ヨコナデ。   | 1mm以下の砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。脚部1/3。                     |
| 検出面           | 25  | 低脚环   | 口径 10.5<br>脚径 5.2<br>器高 4.9                    | 口縁部は上方へ聞く端部でさらに外方<br>へ開き、口縁部は丸くおさめる。  | 口縁部内外面ヨコナデ。外面部へラミガ<br>キ。25は底で底部面相へラケギリを明瞭<br>に残す。26は審著しく単位不明。   | 1～2mmの大砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。柱部内赤色顔料わずかに残る。<br>ほぼ完存。   |
|               | 26  |       | 口径 10.0<br>脚径 4.8<br>器高 3.8                    |   |   | 1～2mmの大砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。内面赤色顔料わずかに残る。ほぼ<br>完存。    |
| 検出面           | 27  | 鼓 形 台 | 口径 (22.8)<br>脚径 (20.4)                         | 外反気味に大きく聞く上台部で、端部は<br>丸くおさめる。脚部は上台部より小さ<br>く、端部をさらに外反させ丸くおさめる。                                | 上台部内面垂面平滑でラミガキが推定<br>される。   | 1～5mmの大砂粒を含む。焼成普通。上<br>台部1/8、脚台部1/3。                |
| 検出面           | 28  |       | 口径 (20.3)<br>脚径 18.4<br>器高 12.2                | 29の筒形の腹は強いヨコナデにより弱い<br>28の瓶壺形の腹は純い。筒部は28は高く、<br>29は低い。  | 口縁端部内外面ヨコナデ。腰窓部内面ヨ<br>コナデ。底部内面と外方向へのラケギリ。   | 1～3mmの大砂粒を比較的多く含む。燒<br>成普通。上台部1/8、脚台部ほぼ完存。          |
| 検出面           | 29  |       | 口径 (21.9)<br>脚径 18.2<br>器高 12.1                |   | 口縁端部内外面ヨコナデ。口縁部内面横<br>方向へのラミガキ。腰窓部内面ヨコナデ。<br>脚台部内面ハケギリ。   | 1～3mmの大砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。上台部1/4、脚台部1/2。            |
| 20号土壤基<br>検出面 | 30  | 甕     | 口径 (12.9)<br>最大刺径<br>(15.8)                    | 口縁部は短く外反する二重口縁で、口縁<br>端部は丸くおさめる。複定される体部は<br>球形を呈すると思われる。器蓋非常に薄<br>い。                          | 内外面とも審著しく調整不規。口縁<br>部内外面ヨコナデ。外面部以下ハケメ<br>調整後ナジ上げ。肩部外面板状工具に<br>よる跡みが見られる。体部背面左方向<br>へのラケギリ。            | 3mm以下の砂粒を含む。焼成普通。黄<br>褐色。底部外面垂面付着。口縁部1/5、体部<br>1/3。 |
|               | 31  | 高 环   | 口径 28.8<br>脚径 17.6<br>器高 22.1                  | 耳部は丸みをもつて、口縁部はゆるやかに<br>外反する。口縁端部は丸くおさめる。腰<br>窓の接合は円周接合式である。底部は<br>ゆるやかに外方へ聞き、脚部端部は丸く<br>おさめる。 | 耳面垂面。口縁部内外面ヨコナデ。環部<br>外面部かいだんのハケメ調整。脚部内面と<br>こどろこに細かい目ハケメ調整。  | 1～3mmの大砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。口縁部内外面黒斑あり。ほぼ完<br>存。      |
|               | 32  | 低脚环   | 口径 (11.2)<br>脚径 5.1<br>器高 4.6                  | 口縁部は上方へ聞き、口縁端部は丸く<br>おさめる。ハの字形に聞く脚部がつく。   | 口縁端部・脚部ともに審著しい。部<br>部の内右方向へのラケギリ後ナジ。  | 1～2mmの大砂粒を含む。器蓋立つ。<br>焼成普通。底面褐色。脚部1/12、脚部は<br>ほぼ完存。 |
| 検出面           | 33  | 鼓 形 台 |  | 筒曲形の腹は純い。   | 器蓋剥離著しい。脚台部内面左方向への<br>ラケギリ。   | 3mm以下の砂粒を含む。焼成普通。黃<br>褐色。脚部ほぼ完存。                    |
| 土器棺墓          | 34  | 大型甕   | 口径 27.7<br>最大刺径<br>36.8<br>底径 (6.3)<br>器高 47.1 | 口縁部は外傾する二重口縁で、口縁端<br>部は丸くおさめる。体部は側面形をなし、器<br>壁は薄い。底部は不規則な平底。焼成後<br>の穿孔 8.0×6.7cm。             | 口縁部内外面ヨコナデ。外面部垂面状文<br>が一帯ある。左方向、下底座方向、左側面<br>部の右方向へのラケギリ。   | 5mm以下の砂粒を含む。焼成普通。黃<br>褐色。底部外面黒斑あり。完存。               |
| I号房<br>埋土中層   | 35  | 甕     | 口径 17.1  | 口縁部は上方へ聞く二重口縁で、口縁<br>端部は角張り面をなす。  | 口縁部内外面ヨコナデ。垂面状文を2条<br>と平行文1、单施文2、ヨコナデにより<br>桶部と口縁部をナシする。肩部外面<br>貫数横縞による波状文を施文する。内面<br>窓部の以下右方向へのラケギリ。 | 4mm以下の砂粒を含む。焼成普通。褐<br>褐色。口縁～頸部1/3。                  |
| 北側底面          | 36  |       | 口径 19.6  | 口縁部は上方へ聞く二重口縁で、口縁<br>端部は丸くおさめる。屈曲部は鋭い。  | 口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面垂面状文<br>の内右方向へのラケギリ。   | 1mmの大砂粒を含む。焼成普通。黃褐色。<br>口縁～頸部完存。                    |



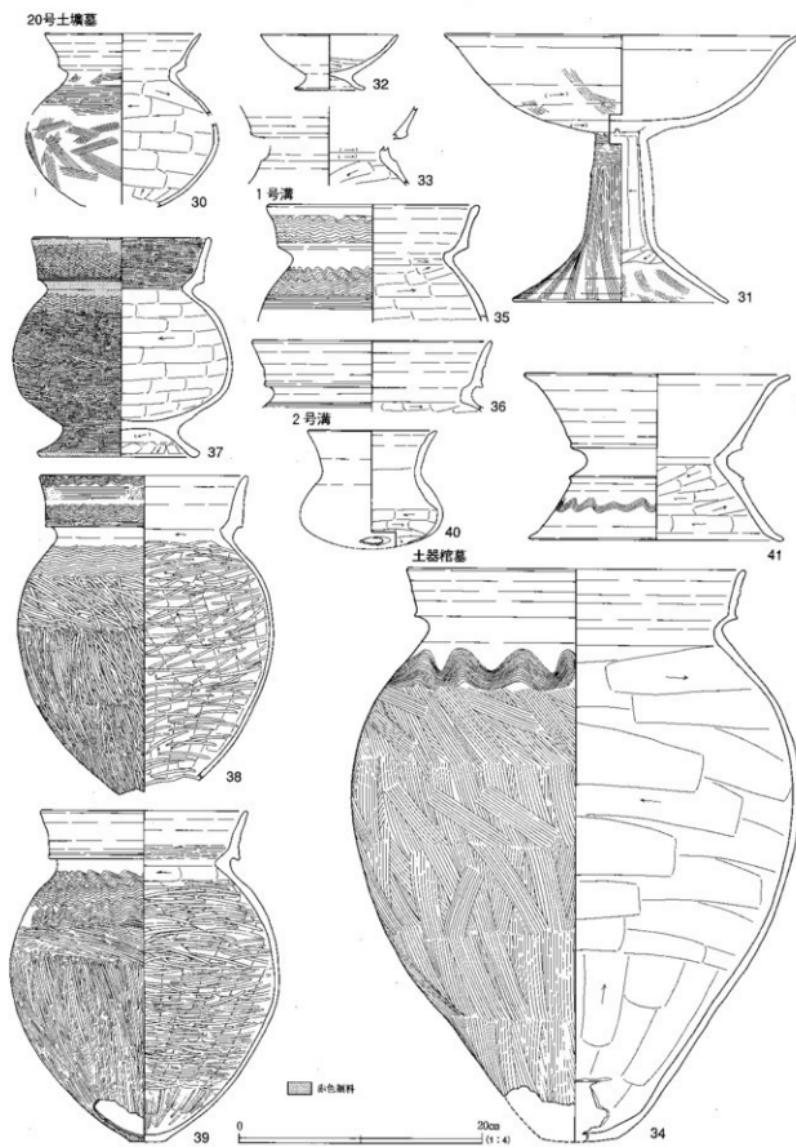
第26图 土壤墓群出土遗物图1

| 出土位置         | No. | 器種       | 法量(cm)                                     | 形態  | 手法   | 粘土 構成 色調 産存度  |
|--------------|-----|----------|--|---|--|---|
| 1号溝<br>NW区底面 | 37  | 台付甕      | 口径 14.2<br>最大胴径 18.0<br>脚径 12.7<br>器高 18.1 | 口縁部は直立気味に開く二重口縁で、口縁部は丸くおさめる。体部はそろばん玉状を呈し、ハの字状に開く底部がつく。  | 口縁部外面目取模様による平行線の上に波状文を施す。肩部外面目取模様による波状文を施す。以下腹方向のヘラケギ。口縁内面積方向の溝なへう1/4キ。体部内面左方利の狙いヘタケズリ。底部内面ナダ。蓋合部内面左方のヘラケズリ。 | 3mm以下の砂粒を含む。黒母多量に含む。焼成普通。黄褐色。外面、内面口縁部に赤色斑状彩。口縁部1/3、体部1/6欠損。 |
|              | 38  | 甕        | 口径 16.6<br>最大胴径 21.0                       | 口縁部は38は直立気味に外反し、39は上方外へ開く二重口縁で、口縁部は丸くおさめる。組合部の後は丸く小さく下腹する。体部は肩の低い倒卵形。39は平底。底盤焼成後38は約6×8cm、39は約4×8cmの穿孔あり。 | 口縁部外面38は目取模様による平行線の上に波状文を施す。39は播磨伝統状の播磨を残す。肩部外面目取模様による波状文を施す。以下腹方向のヘラケギ。口縁内面38は横方向のヘラケギ。体部内面左上方のヘラケズリ後ヘラシギ。  | 3mm以下の砂粒を含む。焼成普通。黄褐色。外外面底無限あり。ほぼ完存。                         |
|              | 39  | 甕        | 口径 16.7<br>最大胴径 20.0<br>底径 3.0<br>器高 27.4  | 口縁部は丸くおさめる。組合部の後は丸く小さく下腹する。体部は肩の低い倒卵形。39は平底。底盤焼成後38は約6×8cm、39は約4×8cmの穿孔あり。                                | 口縁部外面39は目取模様による平行線の上に波状文を施す。39は播磨伝統状の播磨を残す。肩部外面目取模様による波状文を施す。以下腹方向のヘラケギ。口縁内面39は横方向のヘラケギ。体部内面左上方のヘラケズリ後ヘラシギ。  | 3mm以下の砂粒を含む。焼成普通。黄褐色。外外面底無限あり。ほぼ完存。                         |
| 2号溝<br>埋土    | 40  | 甕        | 口径 10.4<br>最大胴径 11.7                       | 口縁部は外反して開き、口縁部は丸くおさめる。そろばん玉状の体部、最大胴径位低い。底盤焼成後約2×2cmの内側からの穿孔あり。  | 口縁部内外面ヨコナダ。内面体部中位以下ヘラケズリ。粘土層接合痕あり。   | 1~2mmの大砂粒を含む。焼成普通。赤褐色。口縁~体部1/2。                             |
|              | 41  | 放形器<br>台 | 口径 21.8<br>脚径 20.9<br>器高 13.1              | 外反気味に大きく開く上台部で、端部はさらに外反せ丸くおさめる。脚部部は上台部より大きくなり、底部部は丸くおさめる。底部部の横は細い。  | 上台部内外面ヨコナダ。脚部部内外左方向の丁寧なハラケズリ。脚部部内面ヨコナダ。  | 3mm以下の砂粒を含む。焼成普通。淡褐色。上台部1/3、脚部部ほぼ完存。                        |

## 古墳

(法量( )は推定値)

| 出土位置         | No. | 器種                                | 法量(cm)    | 形態  | 手法  | 粘土 構成 色調 産存度                              |
|--------------|-----|-----------------------------------|-----------|---|---|---|
| 1号溝<br>埋土NW区 | 42  | 甕                                 | 口径 (16.9) | 口縁部は上方外へ開く二重口縁で、口縁部は丸くおさめる。組合部の後は細い。              | 口縁~部内外面ヨコナダ、筋感著しい。  | 3mm以下の砂粒を含む。焼成普通。暗黃褐色。口縁~部1/5。            |
|              | 43  | 大型甕                               | 口径 (21.0) | 口縁部は内側する二重口縁で、口縁部は丸くおさめる。端部部は外方へ折り下げて變じます。        | 口縁部内外面ヨコナダ。   | 2mm以下の砂粒を含む。赤色粒子わずかに含む。焼成普通。淡黃褐色。口縁部1/12。 |
| NW区表土        | 44  | 甕                                 | 口径 (17.0) | 口縁部は外反する二重口縁で、口縁部は丸くおさめる。組合部はヨコナダにより折り下げて變じます。厚手。 | 口縁部内外面ヨコナダ。内面端部以下右方向のヘラケズリ。                                       | 粘土精良。黒母目立つ。赤色粒子多量に含む。焼成良好。橙褐色。口縁~部1/8。    |
|              | 45  | 口盆 (18.1)                         |           | 口縁部は外反する二重口縁で、口縁部は丸くおさめる。薄手。                      | 口縁部内外面ヨコナダ。   | 3mm以下の砂粒を含む。焼成普通。淡黃褐色。口縁部1/12。            |
| 埋土NW区<br>埋土  | 46  | 口盆 (15.4)                         |           |   |   | 1mm以下の砂粒を含む。焼成普通。淡黃褐色。口縁部1/16。            |
|              | 47  | 口盆 (15.8)                         |           | 口縁部は長く外反する二重口縁で、口縁部は小さく背張る。底部部の横は細い。              | 口縁部内外面ヨコナダ。口縁部外面播磨波状文を施す。   | 粘土精良。黒母目立つ。赤色粒子多量に含む。焼成良好。橙褐色。口縁部1/8。     |
| 埋土NE区<br>埋土  | 48  | 口盆 (13.2)<br>最大胴径 18.2<br>器高 21.1 |           | 口縁部は内尚気味に外反するくの字口縁で、底部部は内側に肥厚する。口縁部は内側に面をなす。      | 口縁部から底部内外面ヨコナダ。体部外側平ら切口目ハケメ調整、頸部内面、底部内面指圧痕。体部内面上位左方向、下位右方向のヘラケズリ。 | 粘土精良。黒母目立つ。赤色粒子多量に含む。焼成良好。橙褐色。完形。         |
|              | 49  | 高 扯                               | 口径 28.1   | 環状は丸みをもつ。口縁部でゆるやかに外反する。脚部との接合は円弧充填式。              | 口縁部内外面ヨコナダ。环部内外部分的に逆時計回りのヘラケズリ部の痕跡。                               | 3mm以下の砂粒を含む。焼成普通。黄褐色。口縁部1/2。              |
| 埋土NE区<br>検出面 | 50  | 低脚甕                               | 脚径 6.4    | 上方外に開く環部とハの字状に開く底部からなる。                           | 底部内外面ヨコナダ。磨滅により調整不明瞭。   | 5mm以下の谷粒を含む。焼成普通。淡黃褐色。脚部ほぼ完存。             |
|              | 51  | 口盆 (12.4)<br>脚径 5.0<br>器高 5.8     |           | 口縁部はやや内尚しながら上方外に開く環部に、小さくハの字状に開く底部がつく。            | 口縁部内外面ヨコナダ後ハケメ調整。底部内外面ヨコナダ。脚部内外面指圧セサエ後ナガ仕上げ。                      | 粘土精良。黒母目立つ。赤色粒子多量に含む。焼成良好。橙褐色。光形。         |



第27図 土器群出土遺物図 2

| 出土位置               | %  | 器種         | 法量 (cm)                         | 形 態   | 手 法  | 胎土 塗成 色調 滲存度   |
|--------------------|----|------------|---------------------------------|---|--|--|
| 2号墳<br>主体部<br>土器付  | 52 | 鉢 形<br>器 台 | 口径 13.8<br>脚径 11.0<br>器高 6.3    | 商周に後のない器台。口縁部、脚台部<br>脚部にカット面。<br>器高   | 内外面へラミガキ。内面部部分的にヘラケ<br>ズリ残る。                                   | 3mm以下の砂粒を含む。焼成良好。黄褐色。全面赤色顔料塗り。完形。                      |
|                    | 53 | 甕          | 口径 16.7<br>最大胴径 26.6            | 口縁部は退化した二重口縁で、内側に面<br>をして内外に肥厚する。底面は凹面を<br>なす。肩曲部の縦は上面に沈縫が入るが<br>厚く続い。環形。   | 口縁部外面ヨコナタ。体部外面粗いハ<br>ケで調整。体部内面ヘラケズリ、ケズリ<br>低い。内面算形、底面指紋沈縫を残す。  | 5mm以下の砂粒を含む。焼成普通。暗褐色。底面外面抹青、肩部外側黒斑あり。<br>口縁部は完形。体部1/2。 |
|                    | 54 | 甕          | 口径 (19.0)<br>脚径 (12.0)          | 環部と底部との境界を組曲し反する口<br>縁部は凹面をなす。肩曲部はその<br>上をわずかにナテ段をなす。                       | 商周外面横ハメわざに残る。内面ヘ<br>ラケズリ。底面外面要平滑でラミガ<br>キの可塑性あり、内面ハケメ調整。       | 胎土稍良。蓋母立つ。赤色粒子多量に<br>含む。焼成普通。褐褐色。口縁部1/4、<br>脚端部1/4。    |
| 4号墳<br>周溝内埋葬<br>施設 | 55 | 甕          | 口径 14.6<br>最大胴径 28.9<br>器高 31.0 | 口縁部は内横する二重口縁で、口縁端部<br>は凹面をなす。肩曲部の縦は上面に沈縫<br>が入るが厚く続い。肩部にヘラ工具に<br>よる鉄突文2点施文。 | 口縁部外面ヨコナタ。体部外面平行時<br>き後ハケメ調整。内面算形、底面指紋沈<br>縫を残す。体部内面左方向のヘラケズリ。 | 3mm以下の砂粒を含む。焼成良好。赤茶<br>色。完形。                           |

## その他

(法量( )は推定値)

| 出土位置                  | %  | 器種         | 法量 (cm)           | 形 態                           | 手 法                                   | 胎土 塗成 色調 滲存度   |
|-----------------------|----|------------|-------------------|-------------------------------|---------------------------------------|--|
| 壁穴式柱頭                 | 56 | 須恵器<br>环 瓷 | 口径 12.9<br>器高 4.5 | 口縁部は短く下方へ細曲し、口縁端部は<br>丸くおさめる。 | 口縁部外面ヨコナタ。天井部外面ヘラ<br>切り後ハケメ調整。内面上げナタ。 | 胎土稍。1mmの大砂粒わずかに含む。黑色<br>粒子含む。焼成普通。外面淡青灰色、<br>内面淡黄白灰色。完形。 |
| 遺構外<br>査査区表面<br>新面表土中 | 57 | 土師質<br>土器基 | 口径 (13.0)         | 口縁部は直線的に大きく開く。                | 口縁部外面ヨコナタ。                            | 胎土稍良。細砂粒を多量に含む。焼成普<br>通。淡黄褐色。口縁部1/8。                     |
|                       | 58 |            | 底深 (6.0)          |                               | 底部外面板目。                               | 胎土稍良。細砂粒を多量に含む。焼成普<br>通。淡黄褐色。蓋部1/8。                      |

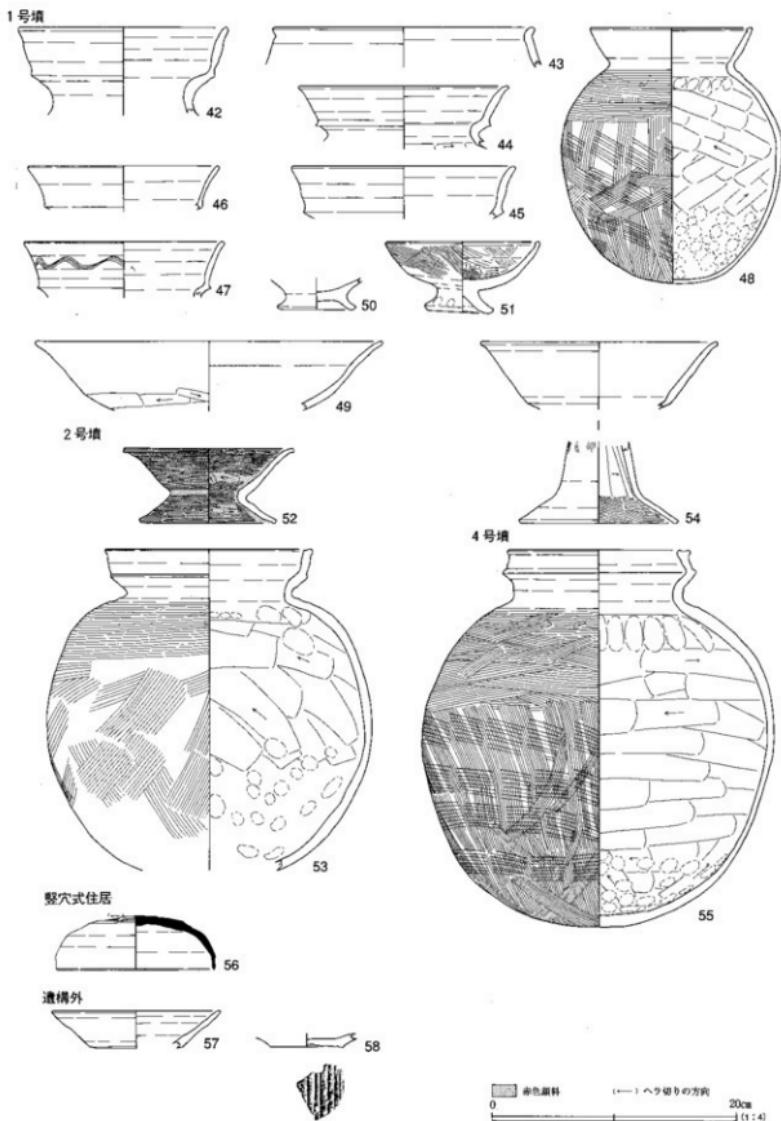
**鉈 (F 1)** 2号墳西側周溝底から出土。断面長方形の茎部から刃部が外反する。刃部は、木ノ葉形で両側に刃を付け、鉈は僅かに認められ、裏面はゆるやかに内湾する。木柄は四字形に溝を切った丸棒で、凹部内側に鍾身を置き、その上に鍾身とほぼ同幅の板材をのせ幅2.5~5.5mmの木の皮を約10.5cmにわたって巻いて固定する。全長21.5cm、刃部長3.1cm・幅0.9cm、茎部幅1.1cm・厚さ0.3cmを測る。

**鉄斧 (F 2)** 2号墳西側周溝底から出土。有肩鉄斧で、全長81.5mm、刃部の厚さ7.0mmを測る。袋部は円形に近い楕円形で、内径24.5mm×17.7mmを測る。側縁は袋部下部より外方に屈曲して肩部を形成し、そのまま両側縁が並行して刃部に至る。刃部は平面的にみて中央が下方に張り出し、やや膨らみをもつ。

**ガラス小玉 J 1**は、1号墳主体部石棺内西小口棺床から出土。透明感なし、濃緑色。最大径5.2mm、孔径1.8mm、長2.9mm。J 2は、2号溝の北側約2m離れた表土中から出土し、北側の査査区外からの転落遺物と考えられる。半透明、濃青色。最大径3.0mm、孔径0.5mm、長2.1mm。

**五輪塔** 五輪塔は、1号土壤周辺に散在しており、その総数は形態が確認できたもので空・風輪5点、火輪2点、水輪4点、地輪3点である。遺構に伴うものは、1号土壤出土の火輪1点(7)のみで、他は全て土壤の周辺に散在しており、正確なセット関係は認められなかった。五輪塔の石材は全て安山岩質である。各個体とも風化が著しく、欠損部分も目立つ。また、梵字や刻銘などはみられない。五輪塔の法量は計測表に示した。他に、宝篋印塔の相輪が1点出土した。

**空・風輪** すべて一石形である。1・2は空輪下半部を幅広く穿り込み、空輪を宝珠形に似せて製作したものであり、ともに柄を有している。3は、風輪部が欠損しているが、同形態と推定される。4は柄をもたず、形態は達磨形となり肥厚している。5は、空・風輪の境部は沈縫(溝)で表現しており横断面隅丸長方形を呈し、側面は直線的で後出的要素を示す。



第28図 古墳・その他出土遺物図

**火輪** 納穴を有するものと有さないものとに分かれる。6は納穴を有さず、降棟の稜部を直線的に長くして軒部の反り上がりは小さく、軒上部から底部までの厚みも小さく、古い形態の要素を含む。火輪の表面には、赤色顔料が塗装され、水輪との接地面には比較的よく残る。7は柄穴を有し、降棟の稜部を短くして軒部の反り上がりが急になり、軒上部から底部までの厚みが増している。

**水輪** 8・9は側面のふくらみが低く扁平な形態を有し、上下面ともやや痩む。10は、8・9と比べ厚くなり側面のふくらみは少ない。11も10と同形態と推定。

**地輪** 12・13は側面が長方形に近く、上面の周辺部に傾斜を持たせており、側面もややふくらむ。上面中央部には、円形に窪みを設けている。14は各面とも平坦で、12・13に比べ高さがあり、より立方体に近い。

**宝篋印塔** 相輪1点が五輪塔とともに出土した。宝篋印塔の出土はこの1点のみであった。

**相輪** 15は九輪の下部が遺存する。9条の突帯のうち6条目から9条目のみ遺存。

#### 五輪塔の法量

##### 空・風輪

| 番号 | a   | b      | c      | d     | e   |
|----|-----|--------|--------|-------|-----|
| 1  | 3.3 | (8.9)  | 13.3   | 8.3   | 2.9 |
| 2  | 3.2 | (9.9)  | 13.0   | 10.9  | 2.6 |
| 3  | 3.5 | (11.1) | 欠      | 欠     | 欠   |
| 4  | 4.9 | 10.2   | 14.9   | 8.1   | —   |
| 5  | 3.6 | (7.3)  | (12.6) | (5.6) | 欠   |

単位: cm  
( ) は残存長

##### 火輪

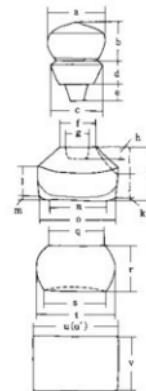
| 番号 | f    | g   | h   | i   | j   | k   | l    | m   | n    | o    | p    |
|----|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|------|------|
| 6  | 11.9 | —   | —   | 9.8 | 2.0 | 3.1 | 1.7  | 5.7 | 19.7 | 30.4 | 15.0 |
| 7  | 11.2 | 8.1 | 5.1 | 6.5 | 7.2 | 1.2 | 10.2 | 1.9 | 21.6 | 24.7 | 13.6 |

##### 水輪

| 番号 | q    | r    | s    | t    |
|----|------|------|------|------|
| 8  | 13.8 | 15.4 | 18.0 | 26.0 |
| 9  | 欠    | 13.4 | 11.7 | 21.5 |
| 10 | 9.9  | 16.4 | 11.6 | 22.0 |
| 11 | 欠    | 欠    | 19.3 | 23.0 |

##### 地輪

| 番号 | u    | u'   | v    |
|----|------|------|------|
| 12 | 23.2 | 12.0 | 10.2 |
| 13 | 26.0 | —    | 13.5 |
| 14 | 27.2 | 24.4 | 17.0 |

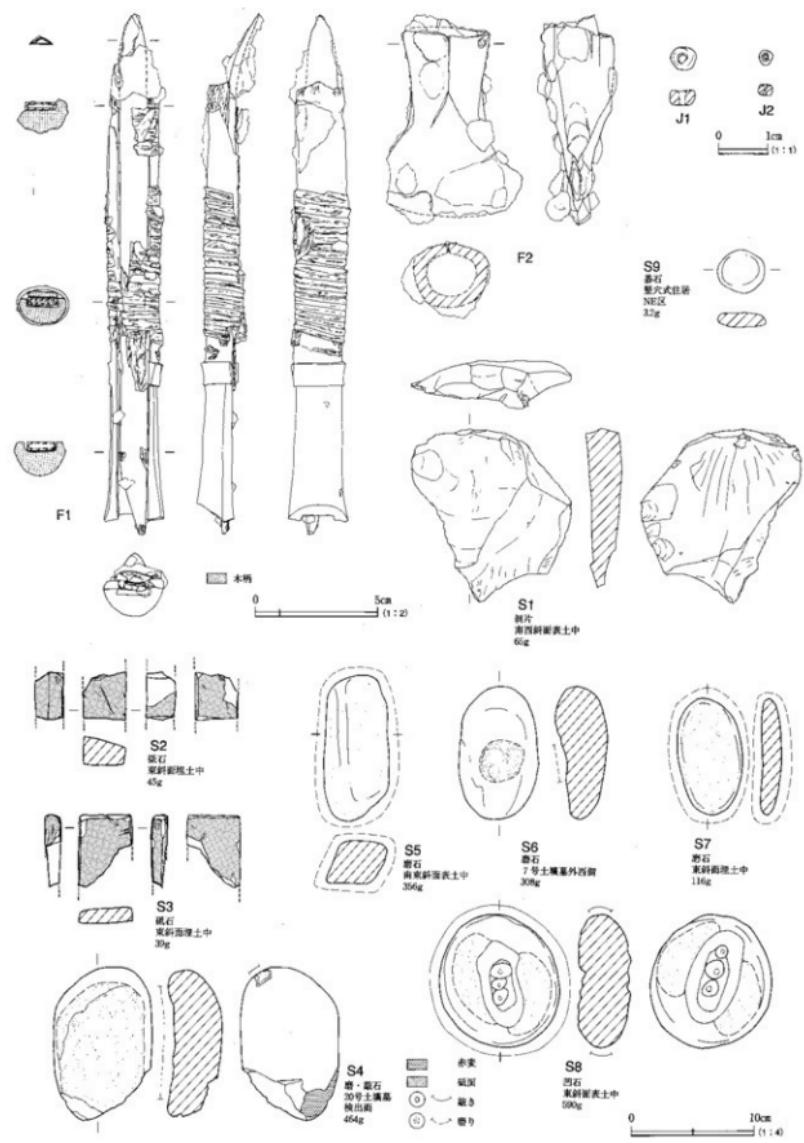


第29図 五輪塔法量凡例

**錢貨** 1号土壤周辺の攢乱土中から出土した。出土総数は43枚を数え、中でも北宋錢と寛永通寶が比較的多く出土した。後世の攢乱により原位置を保つものではなく、まとまりは見られなかった。小片につき判読不能の1枚を除いた42枚の内訳は観察表に示した。

錢貨は六道錢と呼ばれるもので、通常6枚一組で埋納される。出土したもののうち31枚が寛永通寶であった。寛永通寶は、古寛永・文錢・新寛永など時期によって分別される。なかでも新寛永が比較的多く含まれる。新寛永の初鋤が1697年であることから、新寛永初鋤以降の近世墓が存在していたと推測される。

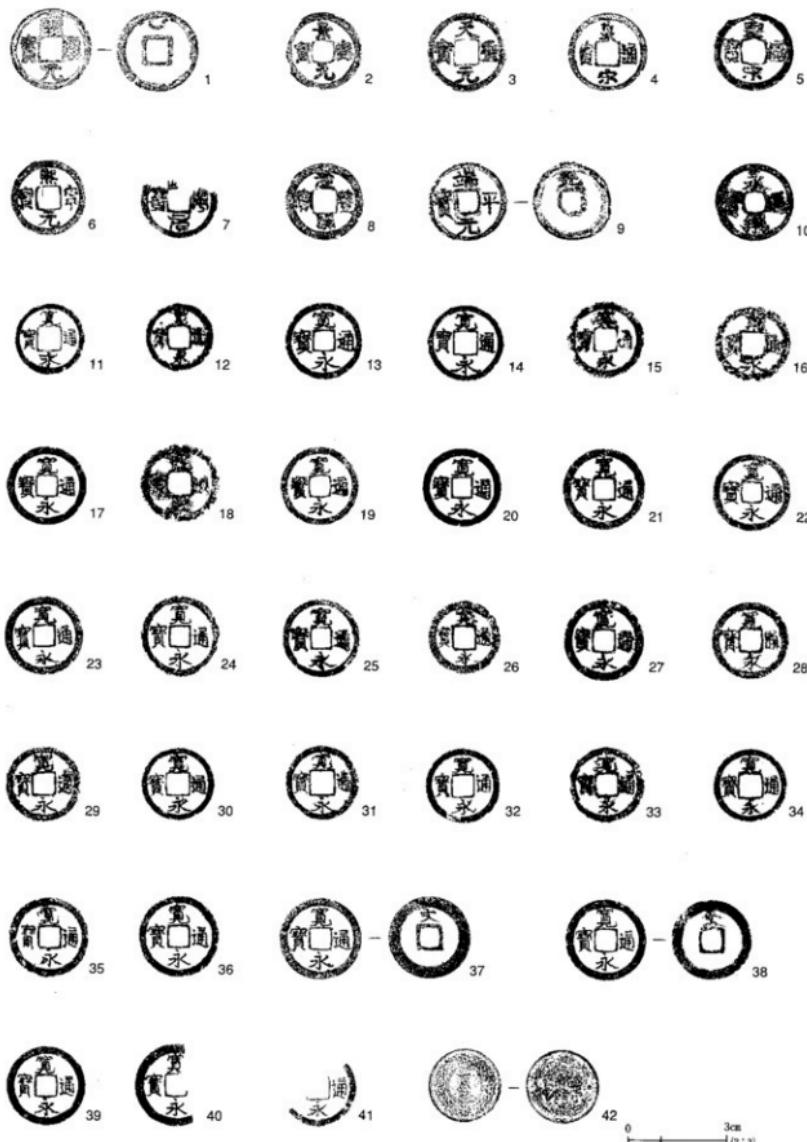
註 計測表及び凡例は、「五輪塔の法量・五輪塔法量凡例」『斐波古墓発掘調査報告書』1985 大栄町教育委員会を参考にした。



第30図 鉄器・玉類・石器遺物図

## 錢貨

| 時代 | 拓本號 | 錢貨名  | 初鑄年(西暦)     | 書体 | 特徴・備考                 | 直徑(cm) | 量目(g) | 枚数   |
|----|-----|------|-------------|----|-----------------------|--------|-------|------|
| 唐  | 1   | 開元通寶 | 武德4年(621)   | 隸  | 「元」の1画の横線が短い<br>背上有月文 | 2.54   | 3.42  | 1    |
| 北宋 | 2   | 景德元寶 | 景德元年(1004)  | 楷  | 「元」行書に近い              | 無背     | 2.48  | 2.82 |
|    | 3   | 天聖元寶 | 天聖元年(1023)  | 楷  |                       | 無背     | 2.48  | 2.49 |
|    | 4   | 皇宋通寶 | 宝元元年(1038)  | 楷  | 「宋」行書に近い              | 無背     | 2.45  | 3.47 |
|    | 5   | 皇宋通寶 | 宝元元年(1038)  | 楷  | 2に付着「寶」篆書に近い          | 無背     | 2.49  | 2.72 |
|    | 6   | 熙寧元寶 | 熙寧元年(1068)  | 楷  | 「熙」は小字                | 無背     | 2.36  | 2.64 |
|    | 7   | 熙寧元寶 | 熙寧元年(1068)  | 篆  | 「熙」欠                  | 無背     | —     | 1    |
|    | 8   | 元豐通寶 | 元豐元年(1078)  | 篆  |                       | 無背     | 2.42  | 2.00 |
|    | 9   | 端平元寶 | 端平元年(1234)  | 楷  |                       | 背上有「元」 | 2.43  | 3.35 |
| 明  | 10  | 永樂通寶 | 永樂6年(1408)  | 楷  |                       | 無背     | 2.40  | 3.16 |
| 日本 | 11  | 寛永通寶 | 寛永13年(1636) | 楷  |                       | 無背     | 2.30  | 1.10 |
|    | 12  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.14  | 1.48 |
|    | 13  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.42  | 1.62 |
|    | 14  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.52  | 1.77 |
|    | 15  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.40  | 2.06 |
|    | 16  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.40  | 2.38 |
|    | 17  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.48  | 2.85 |
|    | 18  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.50  | 2.86 |
|    | 19  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.44  | 2.99 |
|    | 20  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.47  | 3.05 |
|    | 21  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.56  | 3.08 |
|    | 22  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.44  | 3.10 |
|    | 23  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.44  | 3.14 |
|    | 24  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.46  | 3.17 |
|    | 25  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.42  | 3.40 |
|    | 26  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.28  | 3.34 |
|    | 27  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.55  | 3.64 |
|    | 28  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.38  | 2.58 |
|    | 29  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.34  | 2.60 |
|    | 30  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.27  | 2.00 |
|    | 31  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.27  | 2.11 |
|    | 32  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.34  | 2.30 |
|    | 33  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.34  | 2.41 |
|    | 34  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.30  | 2.48 |
|    | 35  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.46  | 3.12 |
|    | 36  |      |             | 楷  |                       | 無背     | 2.51  | 3.22 |
|    | 37  |      |             | 楷  | 背上に「文」                | 2.52   | 2.83  | 1    |
|    | 38  |      |             | 楷  | 背上に「文」                | 2.52   | 3.32  | 1    |
|    | 39  |      |             | 楷  | 無背                    | 2.44   | 3.51  | 1    |
|    | 40  |      |             | 楷  | 「通」欠                  | —      | —     | 1    |
|    | 41  |      |             | 楷  | 「寛」「寶」欠               | —      | —     | 1    |
|    | 42  | 一錢   | 大正11年(1922) |    |                       |        | 2.31  | 3.47 |



第31図 錢貨拓本

## IV 鑑定

### 中峰古墳群出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室

井 上 晃 孝

倉吉市和田字中峰地内の中峰古墳群は、弥生時代後期の土塁墓群、古墳時代前期の方墳群と古墳時代末期の住居遺構の複合遺跡である。古墳群は4基（1～4号墳）からなり、そのうち人骨が出土したのは1号墳と2号墳であった。

以下、各号墳出土人骨について、1) 遺残性、2) 遺残骨名とその部位、3) 推定性別、4) 推定年齢、5) 推定身長、その概略を報告する。

#### 1号墳

石棺の東側に、唯一の頭骨と下顎骨が遺残していた（1号人骨）、その右隣の屍床から歯牙1個検出した（2号人骨）。石棺の反対側の西側には、石枕があり、その近辺から歯牙1個検出した（3号人骨）。以上から、石棺内には被葬者3体が埋葬されていた。

#### 1号人骨

##### 1) 遺残性

遺残骨は頭骨と下顎骨が遺残、遺残性は不良であった。

##### 2) 遺残骨名とその部位

頭 骨：右顎面部（右眼窩部、右頬骨、右上顎）、前頭部、頭頂部、右側頭部の一部

下顎骨：右下顎骨と左下顎骨の前半部

|                 |   |           |           |           |           |           |       |         |       |                 |         |         |     |        |        |
|-----------------|---|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------|---------|-------|-----------------|---------|---------|-----|--------|--------|
| 歯 牙：            | <table border="1"><tr><td>○ ○ ○ ○ ○</td><td>×</td><td>○ ○ ○ ○ ○</td><td>○ ○ ○ ○ ○</td></tr><tr><td>× 7 6 5 4</td><td>3 2 1</td><td>1 2 3 4</td><td>5 6 7</td></tr><tr><td>△ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○</td><td>○ ○ ○ ○</td><td>1 2 3 4</td><td>5 △</td></tr></table> | ○ ○ ○ ○ ○ | ×         | ○ ○ ○ ○ ○ | ○ ○ ○ ○ ○ | × 7 6 5 4 | 3 2 1 | 1 2 3 4 | 5 6 7 | △ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ | ○ ○ ○ ○ | 1 2 3 4 | 5 △ | ○：釘植歯牙 | r：歯根のみ |
| ○ ○ ○ ○ ○       | ×   | ○ ○ ○ ○ ○ | ○ ○ ○ ○ ○ |           |           |           |       |         |       |                 |         |         |     |        |        |
| × 7 6 5 4       | 3 2 1   | 1 2 3 4   | 5 6 7     |           |           |           |       |         |       |                 |         |         |     |        |        |
| △ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ | ○ ○ ○ ○   | 1 2 3 4   | 5 △       |           |           |           |       |         |       |                 |         |         |     |        |        |
|                 |   | △：遊離歯牙    | ×：欠（歯槽開放） |           |           |           |       |         |       |                 |         |         |     |        |        |
|                 |   | △：折損部位    |           |           |           |           |       |         |       |                 |         |         |     |        |        |

##### 3) 推定性別

頭蓋骨の諸形態学的特徴と歯牙の歯冠径が小さいことから、本屍骨は女性骨と推定する。

##### 4) 推定年齢

- ① 頭蓋冠縫合 矢状縫合は頭頂部に軽度の融合、冠状縫合と人字縫合部は未融合
- ② 歯牙の咬耗度 切歯と犬歯は象牙質が露呈、プロカーの2°、小臼歯と大臼歯はエナメル質が平坦化しており、プロカーの1°である。本屍の年齢は壮年中期位と推定する。

##### 5) 推定身長

遺残骨は頭骨と下顎骨のみであるので、本屍の身長は不詳である。

#### 2号人骨 1号人骨（♀、頭骨と下顎骨；成人骨）の右隣の屍床から、歯牙1個検出した。

##### 1) 遺残性

遺残骨は歯牙1個のみで、遺残性はきわめて不良であった。

##### 2) 遺残骨名とその部位

歯 牙：左右不明の下顎中切歯

##### 3) 推定性別

遺残する歯牙は永久歯で下顎の中切歯で、歯冠径が男性歯牙の歯冠径と比較すると、かなり小さいので、本屍

骨は女性骨と推定する。

#### 4) 推定年齢

遺残するのは、下顎の中切歯1個のみ、他の骨が全く遺残していないことから、未熟骨が推定され、本屍の年齢は10歳前後的小児と推定する。

#### 5) 推定身長

本屍は遺残歯牙1個のみであるので、身長は不詳である。

### 3号人骨 石棺西側に石枕があり、その近辺の屍床から歯牙1個検出した。

#### 1) 遺残性

骨は全く遺残なし、歯牙1個のみで、遺残性はきわめて不良であった。

#### 2) 遺残骨名とその部位

歯牙：左上顎第1大臼歯（⑮）の歯冠部のみ

#### 3) 推定性別

遺残歯牙の歯冠径の大きさから、本屍骨はおそらく男性骨と推定する。

#### 4) 推定年齢

遺残歯牙の咬頭は水平化し、象牙質が露呈、プロカーの $2^{\circ}$ であるので、本屍の年齢は壮年中期～後期位と推定する。

#### 5) 推定身長

遺残歯牙からは、本屍の身長は不詳である。

**考察** 1号墳の石棺の内壁を精査すると、山側の石棺内壁のベンガラは完全に消失しているが、反対側の内壁はベンガラが遺残していた。このことは、山側の石棺内壁の目張りの粘土がそれ、内壁面から水の浸入があり、風化が著しく、内壁面のベンガラが消失したものと推察される。同時に屍床面も頻回の浸水に見舞われ、山側の2号人骨（小児）は未熟骨であるため、風化のため、消失したものと推察される。

3号人骨（♂）は成人骨であるが、おそらく本石棺の第1埋葬者であろうと思量され、やはり頻回の浸水により、骨が風化消失したものと推察される。1号人骨（♀）は成人骨で、おそらく最終埋葬者と思量されるが、頻回の浸水にもかかわらず、かろうじて頭骨と下顎骨のみが遺残したものと推察される。

本石棺で石枕があるのは3号人骨（♂）のみで、おそらく3号人骨が主葬者であり、第1埋葬者と思量される。

**要約** 中峰古墳群の1号墳石棺内には、被葬者3体（♂・♀・小児）が埋葬されていた。各被葬者の遺残性は、いずれも不良であった。1号人骨の推定性別は女性、推定年齢は壮年中期位、推定身長は不詳である。2号人骨の推定性別は女性、推定年齢は10歳前後位の小児、推定身長は不詳である。3号人骨は石枕をもち、推定性別は男性、推定年齢は壮年中～後期位、推定身長は不詳である。

### 2号墳

石棺の東側に石枕があり、頭蓋骨のみが遺残していた。

#### 1) 遺残性

遺残骨は頭蓋冠のみで、遺残性は不良であった。

#### 2) 遺残骨名とその部位

頭骨：左右の頭頂部、後頭部

#### 3) 推定性別

遺残頭骨の後頭面の項平面が平滑、外後頭隆起の突出が弱いことから、本屍骨は女性骨と推定する。

#### 4) 推定年齢

頭蓋冠縫合は、外板では冠状縫合と矢状縫合は未融合、内板では矢状縫合の頭頂部はかなり融合がみられ、冠状縫合も融合がみられるので、本尾の年齢は社年中～後期位が推定される。

#### 5) 推定身長

遺残骨は頭骨のみであるので、本尾の身長は不詳である。

**要約** 2号墳の石棺東側に石枕があり、頭骨のみ遺残、遺残性は不良であった。被葬者の推定性別は女性、推定年齢は社年中～後期位、推定身長は不詳である。

## V まとめ

倉吉市和田字道和寺・中峰に所在する遺跡において実施した発掘調査の概要について述べた。検出した遺構は、土塙墓27基・土器棺墓1基・方墳4基・堅穴式住居1棟・溝状遺構1条・土塙2基であったが、調査地区は尾根の先端部にあたり、各遺構は丘陵頂部から北側にかけてさらに拡がると推測される。したがって、今回確認した土塙墓群の全容は明らかでない。

以下、各遺構の時期観および変遷について検討する。

### 1 出出土器について

今回の調査で出土した土器は、大きく弥生時代後期から古墳時代前期のものである。

器種としては、壺・台付壺・大型壺・注口土器・盤・台付盤・大型盤・高杯・低脚杯・鼓形器台・大型器台・鉢が出土しているが、遺構に伴うものは僅かであった。以下、遺構に伴うものを中心的に時期を検討する。

まず、土塙墓群から出土した土器についてみる。1号溝の底から壺35・38・39、台付壺37が比較的まとめて出土している。時期は、形態・手法の特徴から既存の編年においてはめると、土井編年の上種第5遺跡貯蔵穴7号・住居址27号期（以下、上種第5・7貯）には併行するものと考えられる。また、16号土塙墓検出面出土の壺17、低脚杯25・26、鼓形器台27～29はさらに1段階新しく東高江遺跡2号貯蔵穴・櫛塚遺跡2号貯蔵穴期（以下、東高江2貯・櫛塚2貯）併行である。20号土塙墓検出面出土の壺30・鼓形器台33・高杯31は供献状態のまま出土したセットである。壺30は、体部の球形化、底部の丸底化、体部外面のハケメ調整が顕著に施されており新しい要素が認められることから、時期は宮ノ下遺跡4号・6号住居址期（以下、宮ノ下4・6号）に併行する。1号土器棺墓の大型壺34は、櫛塚2貯期に併行する。この他、土塙墓群から出土した土器は、上種第5・7貯～宮ノ下4・6号併行期におさまるものである。

次に、古墳群から出土した土器についてみる。1号墳西側周溝の底付近で壺44～47・壺42・高杯49が比較的まとめて出土している。供献状態とはいえないが、1号墳築造に近い時期、1号墳埴丘上からの転落遺物と考えられる。時期は宮ノ下4・6号期に併行する。また、1号墳北側周溝の埋土中層から壺48・低脚杯51が出土した。1号墳追跡時の埴丘からの転落遺物ではないかと思われる。口縁端部は内面肥厚し、端面はカットされる特徴から、時期は、宮ノ下遺跡3B号・7号住居址期（以下、宮ノ下3B・7号）に併行し、2号墳主体部内の転用枕である鼓形器台52、西側周溝内埋土中出土の高杯54もこの時期に併行するものである。4号墳周溝内埋葬施設の壺55は、口縁部は内傾する二重口縁で、口縁端部は凹面をなし屈曲部の稜は上面に沈線が入るが厚く鈍く新しい要素をもつ。時期は、長瀬高浜遺跡II期（以下、長瀬II）に併行する。

以上、遺構に伴う出土土器から時期を検討すると、1号溝出土壺35・38・39、台付壺37は、東伯耆を14期区分

<sup>註2)</sup>した松井編年のIX・X期に比定される。また、20号土壤基検出面出土甕30は松井編年のXII期、畿内の庄内式土器を5期区分した清水編年の庄内4期に併行する。

## 2 遺構について

### 土壤墓群

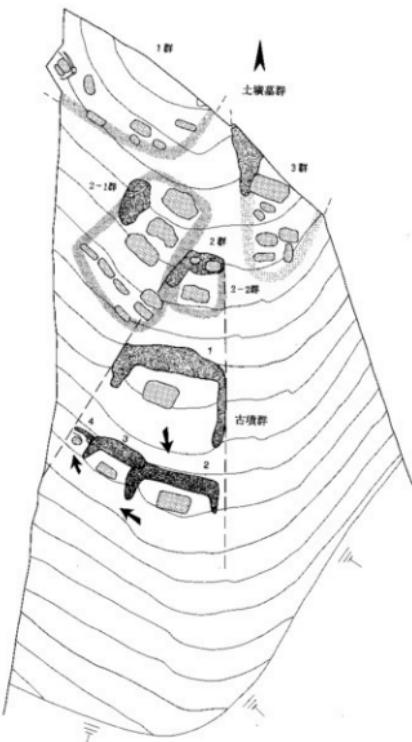
27基の土壤墓は3条の溝とともに調査区内の標高46~52m付近に所在する。土壤墓は、墓壙底の規模で大きく大型（長さ2.5~2.7m、幅0.7~0.9m）2基（9・16号）、中型（長さ1.2~2.0m、幅0.2~0.7m）20基（2~5・8・10・12~15・17・18・20~27号）、小型（長さ0.5~0.9m、幅0.2~0.6m）5基（1・6・7・11・19号）が存在する。また、木棺形態は、痕跡の確認された8基（6号・9号・10号・12号・18号・21号~23号）のうち、18号・22号・23号土壤墓は小口板で側板を挟み込む形態で、他は全て側板が小口板を挟み込む形態のものであった。また、区画を施す方法として溝があり、墓域の一辺を直線的に画するものとL字状に画する2種類がある。

土壤群墓を、出土土器・立地・規模・形態・溝との関係などから分類・整理すると、大きく1~3の小群に分類できる。（第32図）

1群 標高50~52mの南斜面上、調査区最高所の尾根筋に位置する。1号~8号土壤墓・1号土器棺墓、計8基の中・小型の土壤墓と土器棺墓1基を確認。各土壤墓の主軸は等高線に沿ってほぼ東西方向で、標高51m付近を東西方向に連なる。この土壤墓群は分布状況等から、調査区外の尾根高所に広がっていると推定される。

2群 標高46~50m、1群の南側の尾根筋に16号~27号土壤墓、1号・3号溝の計12基の土壤墓と溝2条で構成される小群。標高49m付近を等高線に直交し直線的に延びる1号溝と、その南東側の標高48m付近をL字状に折れる3号溝との間を大型の16号をはじめ中型の17・18号土壤墓の3基が主軸を等高線に沿ってほぼ等間隔で南北に並列する。また、3号溝の南側に近接して主軸が等高線に沿う中型の21号、溝底の中心から東側にかけて東西に小型の19号・21号土壤墓が主軸を溝に沿って連なる。その下辺の標高46~47m付近を、中・小型の22号~27号土壤墓6基が主軸を東西方にとり等高線に沿って直線的に連なる。

さらに2群は、3号溝を境に西側と東側にわかれ、前者を2-1群、後者を2-2群とすることができます。



第32図 中峰古墳群遺構変遷模式図

2-2群は、L字型の3号溝によって墓域を区画される。その内側に中型の21号土壙墓が溝と併行して位置する。溝の中心から東側にかけては、小型の19号・20号土壙墓が溝底に連なる。

3群 標高48~51mの東斜面に位置する。9号~15号土壙墓・2号溝の計7基の土壙墓と溝を確認。等高線に直交して延びる2号溝の一部を確認し、その東側に溝と直交する大型の9号土壙墓が位置する。さらに9号土壙墓の南側標高48~50mの範囲内に中・小型の10号~15号土壙墓が配置される。

ここで各小土壙墓群について比較検討する。群構成からみると、複数の土壙墓で群を成すものと少数の土壙墓で群を成すものとに分かれる。前者に該当するものは1・2-1・3群の3群、後者に該当するものは2-2群の1群である。2-1群と3群を比較すると、溝の形態・土壙墓の配置に共通性を持つ。しかし、小群の下辺に位置する中・小型土壙墓の配置および主軸方向をみると、統一性がある2-1群に対し、統一性がなく尾根稜線からやや離れた東斜面に位置する3群は2-1群より後出的要素がみられる。

次に、溝の形態から比較検討する。2-1群や3群では、直線的な形態の溝が群の西側に位置し、これに直交する形で比較的大型の土壙墓が複数配列される。さらに下辺に比較的小型の土壙墓が複数配列される。これら両者は、集団的な配置形態をとっている。これに対し、2-2群では、比較的大型の21号土壙墓1基を画するかたちで3号溝がL字状に囲んでおり、前者の集団墓的性格に対し個人墓的性格が強い。

以上、小土壙墓群はおむね1群が構成された後、2-1群・3群がほぼ同時期に構成され、2-1→2-2群と変遷すると推定される。また、出土土器も上種第5~宮ノ下4・6号期に含まれ、時期差があまりみられないことも合わせると、弥生時代後期において比較的短期間に小土壙墓群が形成されたと推測される。

#### 方墳群

4基の方墳は、土壙墓群の南側、標高40~45m付近の斜面の尾根筋に1号墳、さらに南側に隣接して2号~4号墳が隣り合う周溝を共有して位置する。

墳丘規模の比率を、周溝を含んだ東西長を基準に比較すると、1号墳から順に4:3:2:1と一定の比率で縮小化する傾向がみられる。また、古墳の配置をみると、1号墳を中心軸とし東西の周溝外縁線を南側に延ばしたライン内に、2号~4号墳が隣り合う周溝を共有して納まる。これらは、古墳築造に際して占地・規模についてある一定の規制のもとに古墳群が構成されていることが窺える。

次に、古墳群の変遷について検討する。古墳群から出土した土器は非常に少なく時期決定の決め手になるものは僅かであった。このため、各古墳の規模、立地、切り合い、埋葬施設の形態、2号墳主体部と4号墳周溝内埋葬施設、1号墳と2号墳の周溝内から出土した土器より築造時期を推定したい。古墳の切り合いによる新旧関係は、2号墳→3号墳→4号墳である。立地からみた1号墳と2号墳の関係は、尾根筋に沿って古墳群最高所に位置する埴丘規模の一一番大きい1号墳、2番目の規模の2号墳の順番と考えられる。したがって、古墳の変遷は1号墳→2号墳→3号墳→4号墳と推定される。

以上のことをまとめると、本遺跡の遺構の変遷は次のように考えられる。

- ① 1群…尾根先端部の傾斜変換点に造られる。
- ② 2-1群…1群より低い斜面の尾根筋に造られる。(下辺の中・小土壙墓には統一性がある)
- ③ 3群…2-1群とほぼ同じ等高線上の東斜面に造られる。(下辺の中・小土壙墓に統一性はない)
- ④ 2-2群…2-1群と同じ尾根筋に隣接して造られる。(一墳一墓墓。これ以降統く方墳群と合わせて規模・配置に規則性がもたれる)
- ⑤ 1号墳…2-2群と時期差なく同一尾根筋に近接して築造。(堅穴式石室状の埋葬施設)
- ⑥ 2号墳…1号墳の南側に近接して造られる。(2号墳築造後、1号墳主体部の追葬が行われる)

- ⑦ 3号墳…2号墳と周溝を共有し造られる。
- ⑧ 4号墳…3号墳と周溝を共有し造られる。(周溝内埋葬施設として土器棺が埋置される)
- ⑨ 4号墳以降は、立地条件の変化などによるのか、この斜面には造られなくなる。
- となり、本遺跡では弥生時代後期の集団墓としての土壙墓群から一墳一葬の方墳へと連続的に変化している。
- 丘陵頂部を中心として営まれる土壙墓群としては、県内では鳥取市桂見土壙墓群や鳥取市西桂見土壙墓群、<sup>註4)</sup>倉吉市二タ子塚遺跡の土壙墓群などが知られており、弥生時代後期後半に散見される。そして、それら土壙墓群に<sup>註5)</sup>統く前期の古墳が同一丘陵上に築造される傾向が見られる。
- また、土壙墓群に石列や貼石などの区画施設を設ける例として、墓域を整地し周囲の一部を石列で区画した桂見土壙墓群、墓域の一部を鏽先状に貼石で区画した泰久寺中峯土壙墓群などがみられるが、本土土壙墓群の区画施設は溝によるもので、石列や貼石などは認められなかった。
- 本遺跡と同様、溝によって墓域を区画された土壙墓群と、さらに古墳群へと連続する遺跡として二タ子塚遺跡があげられる。ここでは、丘陵頂部に10基の土壙墓が規則性をもって配置され、その三方が4条の溝によって方形に区画される。そして、やや離れた傾斜変換点に5基の方墳が周溝を接して造られる。墳丘規模も一辺4.3m～12.5mで大方墳群とほぼ同規模である。

まず、両遺跡の土壙墓群と古墳群の立地・位置関係について比較してみる。二タ子塚遺跡では、土壙墓群は丘陵頂部に位置する。そして、比較的距離をおいて土壙墓群より低位である斜面上に方墳群が形成される。本遺跡でも、土壙墓群は丘陵頂部から斜面にかけて位置しており、土壙墓群より低位の斜面上に方墳群が形成される。

次に、墓域の区画施設について比較する。二タ子塚遺跡では、4条の溝で土壙墓群全体の墓域を区画している。これに比べ本遺跡の土壙墓群は、複数の小土壙墓群ごとに墓域が形成され、溝で小土壙墓群間を区画しており、両遺跡とも溝以外の区画施設は認められなかった。さらに、古墳群を比較した場合、立地・墳形・規模・周溝を接するあるいは共有するなどの共通要素が多く見られる。しかし、二タ子塚遺跡では、墳丘は築造順に大型化され最終的に竪穴式石槨が採用されているが、これに対し本遺跡では、墳丘は築造順に縮小化され埋葬施設も簡素化される傾向にある。

### 1号墳主体部の埋葬形態について

1号墳主体部の埋葬形態は、2号墳の箱式石棺墓、3号・4号墳の木棺墓に比べ非常に卓越している。構造は、両小口石を立てた後、側壁部および小口石の裏側に板石を小口積みし両小口石上辺の高さに揃えている。床面には砂を敷きつめ、被葬者（追葬を含め計3体）は直葬され、副葬品として鉋・鉄斧・ガラス小玉が納められる。また、棺内には赤色顔料が顯著に塗彩されるものであった。竪穴式石槨と比較すると、小口石を立てる点を除けば四面に板石を小口積みし壁を構築している点で類似性が認められる。しかし、粘土床や割竹形木棺ではなく、複数の被葬者が直葬されていた。したがって、1号墳主体部は、普遍的に見られる竪穴式石槨と比較すると、形態的には竪穴式石槨状であるが、規模・使用痕跡から検討すれば、機能面からみて石棺として位置付けられるものである。

この埋葬形態について現在のところ他の確認例も少なく、県内で類例をみると4例ある。<sup>註8)</sup>

中部では、倉吉市上神猫山遺跡（3次調査）1号墳（方墳・一辺16m）1号主体の箱式石棺（4世紀後葉頃の築造）にみられる。これは、小口石で側石を挟み込むように立て、側石の上に板石を小口積みし、蓋をした後粘土で覆うものである。また、倉吉市夏谷遺跡E地区3号墳（方墳・18.2m×15.7m）1号埋葬施設（4世紀後葉頃）は、両小口に副室を持つ箱式石棺で、両側壁・両小口石の周囲に板石を敷きつめ、その上に粘土を敷いてから蓋石をするものである。<sup>註9)</sup>東部では、鳥取市面影山33号墳（円墳・直径15m）第1主体部にみられる。これは、<sup>註10)</sup>

西側小口石は両側石を挟み、東側小口石は両側石に挟まれる形態の箱式石棺で、裏込め石に角礫を敷きつめその上に板石を積み上げている。さらに、小口・側石の上に板石を4段積みした後蓋石をし、最後に蓋石の隙間に<sup>注11)</sup>黄白色粘土を丁寧に詰めている。西部では、大山町妻木山遺跡14号墳（方墳・一辺14m）第1埋葬施設にみられる。これは、箱式石棺の外側に裏込め石である河原石を敷きつめ、蓋石で蓋をした後粘土で覆うものである。

これらは、いずれも箱式石棺を組んだ後、その上部あるいは周間に竪穴式石槨状に板石を平積みあるいは河原石を敷きつめている。特に猫山遺跡1号墳1号主体は、基本的に箱式石棺を組んでいるが、蓋石を置く前の段階で側石の上に板石を敷きつめている点など、部分的に竪穴式石槨様に仕上げていると考えられる。

中峰1号墳主体部の埋葬施設の形態の特徴は、普遍的に見られる箱式石棺の規模ではあるが、両小口石は立てるが側石を立てず、箱式状の形態ではなく、両小口石に挟まれる形で板石を蓋石の高さまで6～7段小口積みし側壁を構築している。この両側壁を全て板石の小口積みしている点で、板石を箱式に組む他の4類例とは様相を異にする。中峰1号墳主体部の埋葬施設は、竪穴式石槨を小型化、かつその形態を簡略化した埋葬施設と考えられる。

### 3 小結

2～2群の前と後では、墓制の形態についてそれぞれ飛躍的な変化が見られた。土塙墓群は、2～2群を経て1号墳へと墓制形態を変化させ連続する。2～2群は、土塙墓群と古墳群の墓域が重なる位置に存在しており、また、土塙墓と古墳の両方の要素を兼ね備える墳墓である。

以下、2～2群の特徴を挙げ若干の考察を加えたい。

1・土塙墓群の中に位置、2・小規模な埴丘、3・中心主体をL字状の溝で区画し、一墳一墓の個人的な墓域を形成、4・中心主体の埋葬形態は木棺墓、5・副葬品が遺存しない、6・以後、尾根筋に古墳群を形成していく、7・出土土器の時期は、宮ノ下4・6号期に比定、などが挙げられる。

以上の特徴から、おおまかに1～5は弥生墳墓の要素、6～7は古墳の要素として捉えることができる。

ここで、2～2群の性格を考えるうえで、古墳の定義（近藤義郎 1984）を踏まえて位置・規模・形態・外表施設・内部構造・副葬品等について検討すると、小規模な低埴丘・L字状の溝によるやや不明瞭な区画・主体部は木棺墓を採用するなど、古墳の定義には該当しない要素が多くみられる。さらに、位置については、3号溝が2～1群と2～2群とを意識的に区画しているとしてこれを隔離された位置として捉えるのか、土塙墓群全体の墓域の中に存在しているため隔離された位置ではないとして捉えるのかでは、2～2群の性格を大きく変えてしまう。また、2～2群の位置付けとして、古墳としては定義付けしにくいわけだが、以後連続する古墳群を形成する墓域の起点に位置している点には注目したい。2～2群から方墳群は、前方後円墳成立時に生じた古墳造営に於ける規制下に連続して形成されたと考えたい。

このように、本遺跡における墓制の形態の変遷について、2～1・3群にみられる形態の小土塙墓群から2～1群へ、2～2群から1号墳へと連続して二度の大きな変化をみることができる。この変化のなかにおいて、2～2群はその前後の墓制の要素を備え、かつどちらにも属さない性格の墳墓と言えよう。したがって、古墳時代初頭における弥生墳墓から古墳への過渡的な要素をもつ墳墓として位置付けたい。

以上、今回の調査では、弥生最終段階の土塙墓群とこれに続く発生期の方墳群について明らかになったことがらを述べた。弥生時代から古墳時代への一つの大きな画期のなかで、「集団墓」から「一墳一墓」へと変化する同一集団の墓制の流れを連続的に捉えることができ、墓制の形態の変遷についての新資料として重要な役割を果

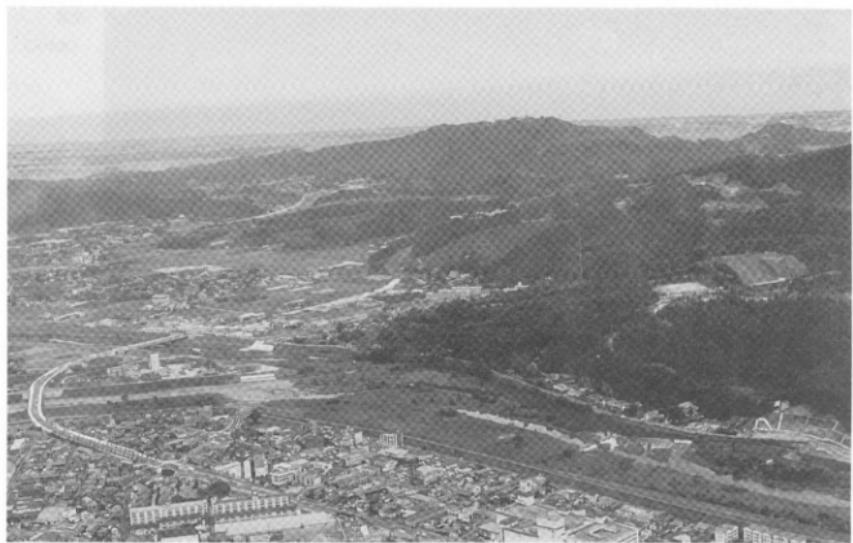
たるものと考える。また、1号墳主体部の竪穴式石室を模した石棺は、他に類をみない特異な埋葬形態であり、本市における竪穴式石室の導入と普及を考えるうえで貴重な資料となりうるものである。今後、さらに調査研究が進展し、弥生墓から古墳への移行過程が明らかにされることを期待したい。今後、この報告書が同様の遺跡を研究する際の基礎資料の一つとなれば幸いである。

註

- 1 土井珠美 「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』 第18回埋蔵文化財研究会事務局 1996
- 2 松井 淳 「東の土器、南の土器－山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態－」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会 1997
- 3 清水真一 「因縁・伯善における庄内式併行期の土器」『庄内式土器研究Ⅲ－庄内式併行期の土器生産とその動き－』『庄内式期の土器の併行関係』 庄内式土器研究会 1994
- 4 船井武彦 「柱見塙群」 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1984
- 5 前田 均 「西柱見遺跡Ⅱ」 鳥取市教育委員会・倉見古墳群発掘調査団 1984
- 6 高取英達他 「二タ子塙遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1995
- 7 日野琢郎 「泰久寺遺跡発掘調査報告－中峯地区－」 関金町教育委員会 1984
- 8 真田廣幸 「鷲山遺跡・第3次発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1985
- 9 加藤誠司他 「夏谷遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1996
- 10 稲浜隆志 「面影山古墳群発掘調査報告書－面影山32・33・34・35・36・83・88・97・98号墳の調査－』 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996
- 11 大山町教育委員会・大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団編 「妻木新山遺跡」「妻木・晚田遺跡群現地説明会資料」 大山町教育委員会・大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団 1997
- 12 「古墳とは前方後円墳を代表かつ典型とし、その成立および変遷の過程で、それとの関係において出現した（つまり位置・規模・形態・外表施設・内部構造・副葬品等々のすべてまたは一部にその影響が見出されるという意味で）墳墓をすべて包括する概念であると規定することができる…」  
近藤義郎 「前方後円墳をめぐる諸問題」『考古学研究』第31巻第3号 考古学研究会 1984

参考文献（順不同）

- 東森市良 「山陰地域における弥生墳丘墓の展開と地域的特性」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』 鳥根大学法学部考古学研究室 1992
- 三木文雄 「古墳時代の鏡について」『考古学雑誌』第42巻3号 1957
- 植野浩三他 「妻木古墳－発掘調査報告書－」 大栄町教育委員会 1985
- 郡司勇夫 「日本貨幣図鑑」 東洋経済新報社 1981
- 田辺昭三 「須恵器大成」 角川書店 1981



△ 調査区遠景 空中写真（南東から）

▽ 調査区全景 空中写真（南西から）

図版 2



全景  
(北から)



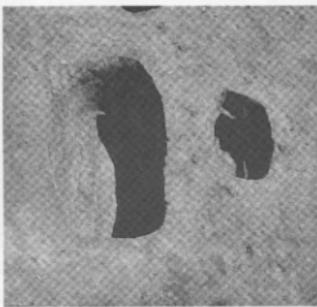
1号・2号土壤墓・土器棺墓（北西から）



3号土壤墓（南から）



4号土壤墓（南東から）

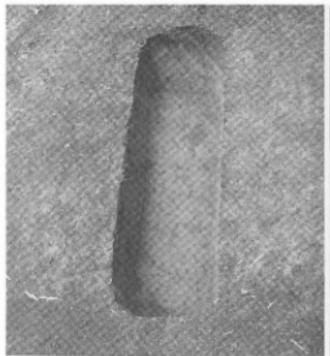


5号・6号土壤墓（北西から）

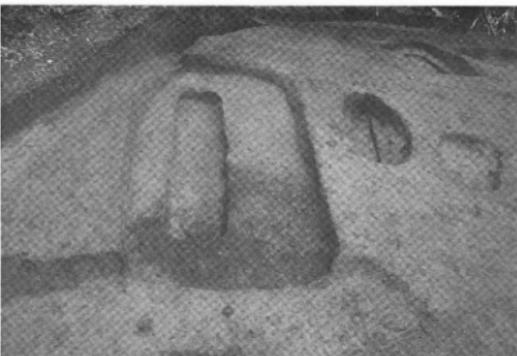


7号土壤墓（西から）

図版 3



8号土壤墓（東から）



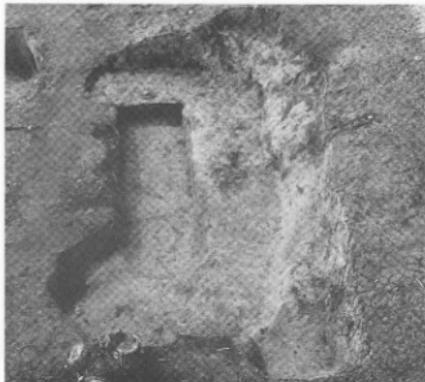
9号～11号土壤墓（西から）



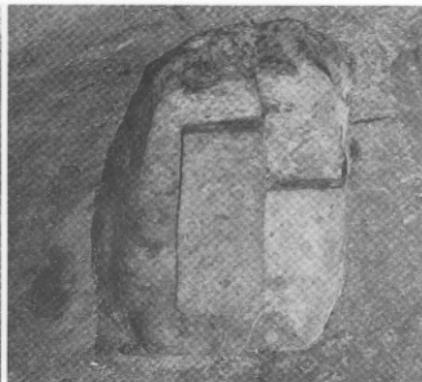
12号～15号土壤墓（西から）



16号土壤墓（南東から）



17号土壤墓（南東から）



18号土壤墓（南東から）

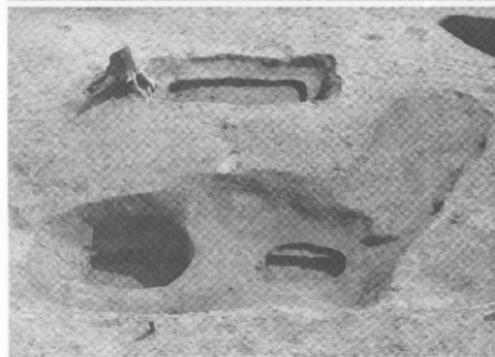
図版 4



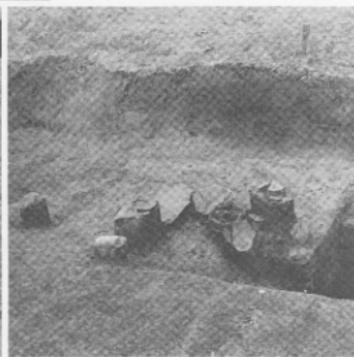
16号～18号土壤墓

1号溝

(西から)



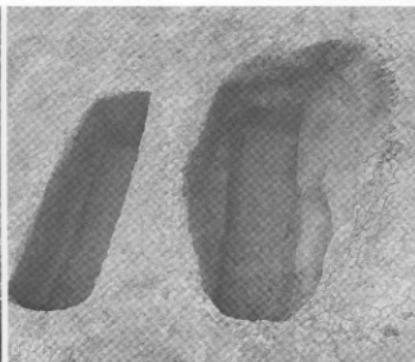
19号～21号土壤墓、3号溝（北から）



20号土壤墓遺物出土状況（南から）



21号土壤墓（東から）



22号・23号土壤墓（南東から）

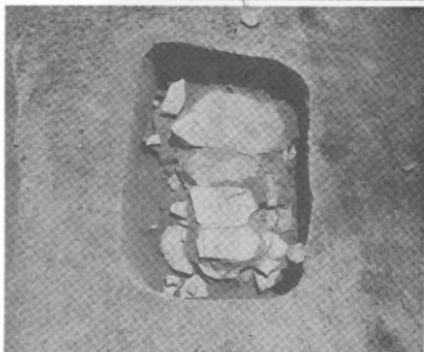


26号土壤墓（南東から）

図版 5

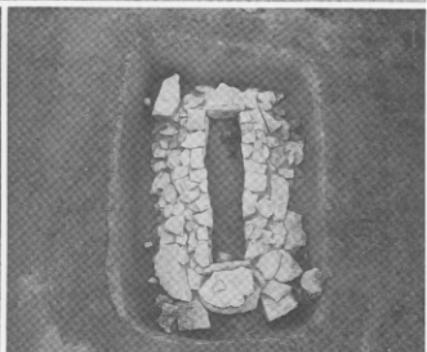
1号墳

(南から)

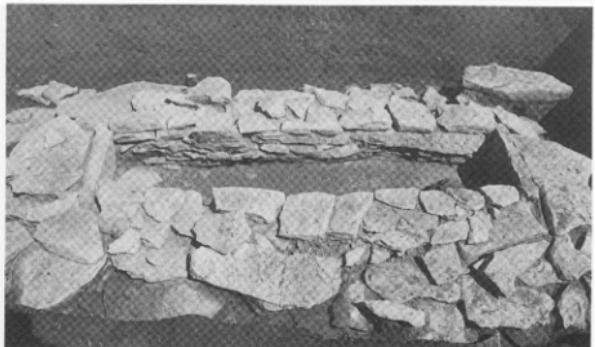


1号墳主体部 △ 蓋石 (西から)

▷ 棺内 (南から)



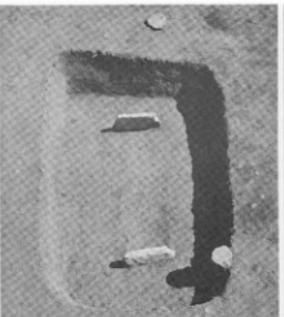
△ 棺内 (西から)



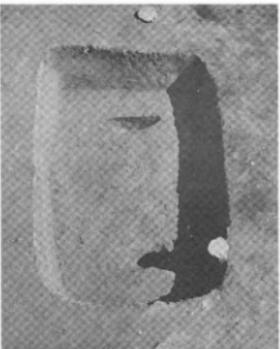
図版 6



1号墳主体部△基底石（西から）



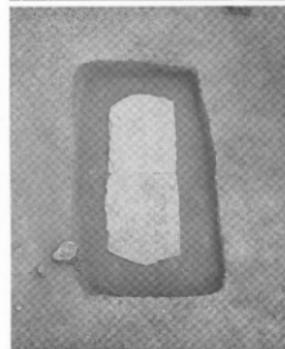
△小口石（西から）



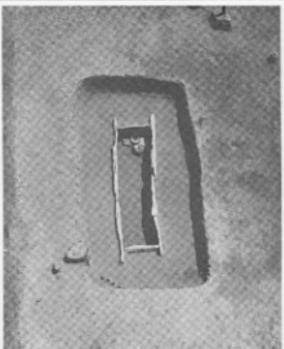
△完掘（西から）



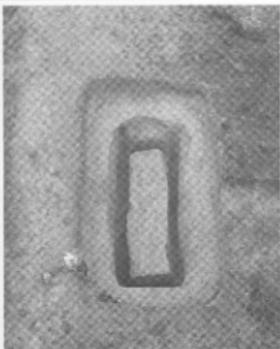
2号墳  
(南から)



2号墳主体部△蓋石（西から）



△棺内（西から）



△完掘（西から）

3号墳

(南西から)

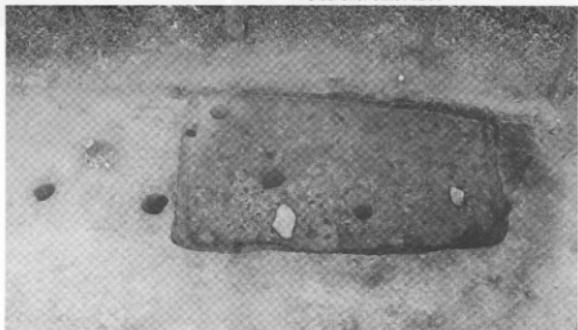


4号墳 (南西から)

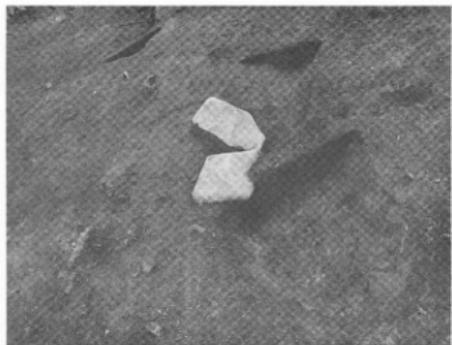
竪穴式住居、ピット列

(北東から)

4号墳周溝内埋葬施設 (南から)



図版 8



1号土壤  
(北から)



2号土壤、溝状造構 (南から)

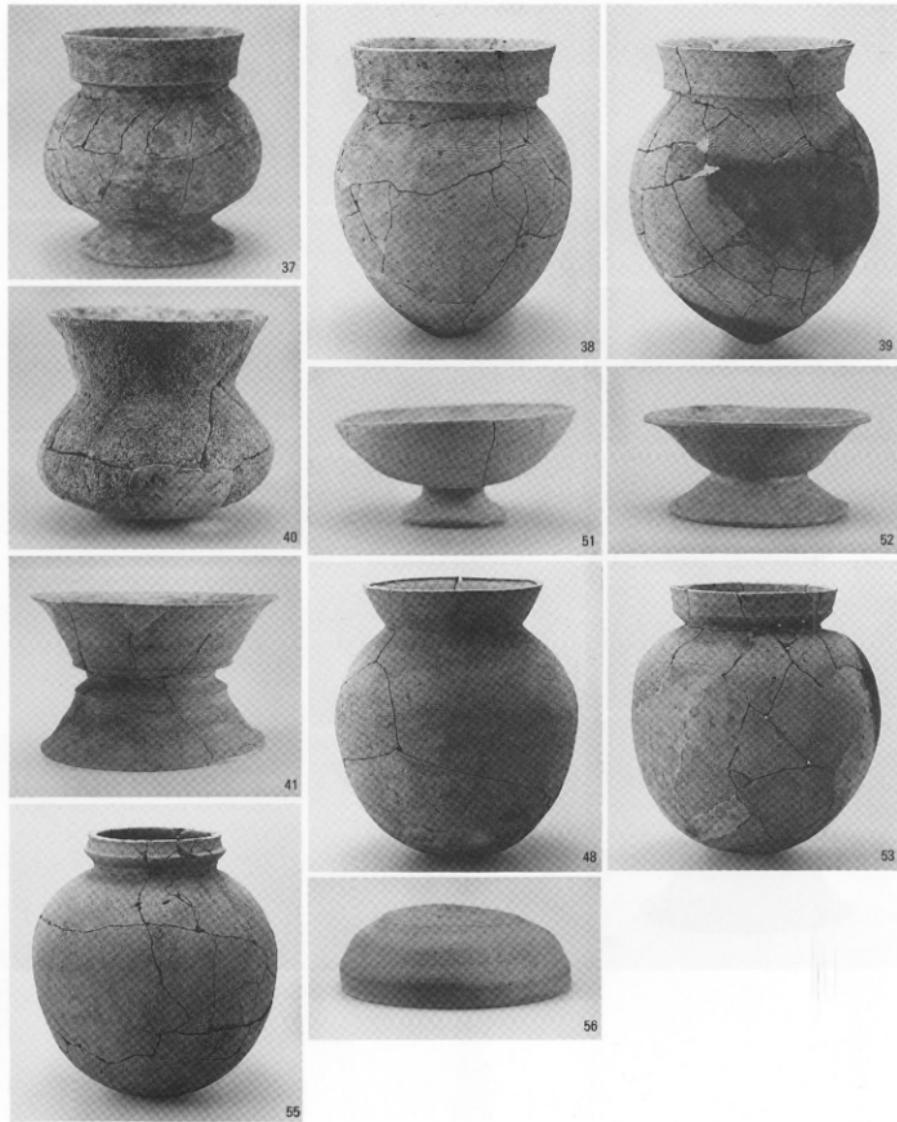


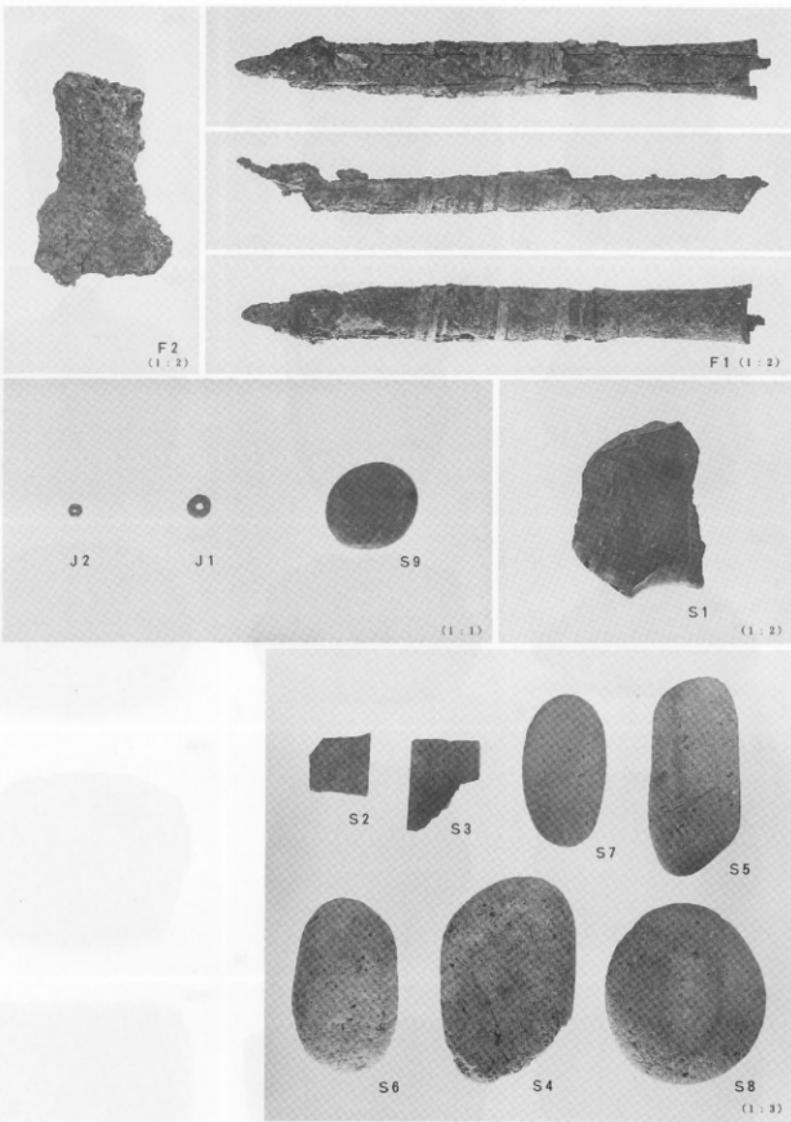
溝状造構 (南から)



图版10

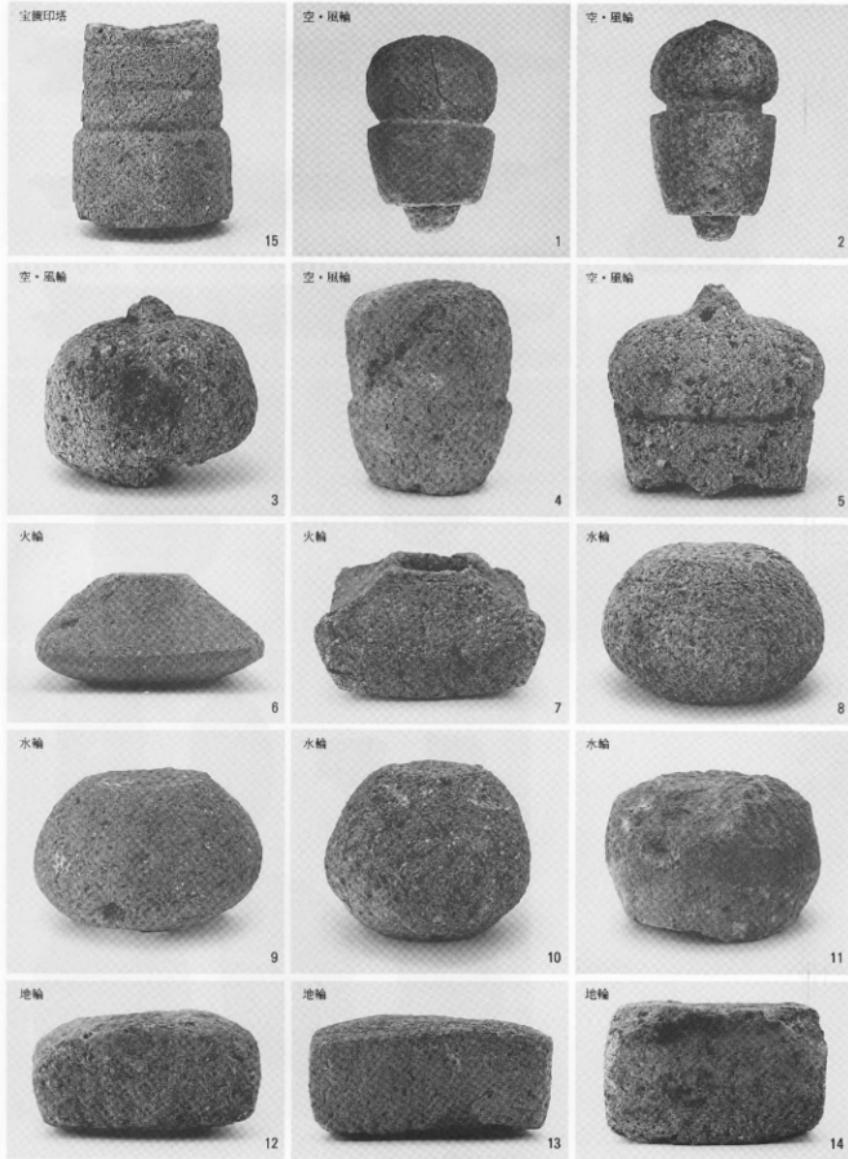
满·古墳・竖穴式住居出土土器





圖版12

五輪塔・寶蓋印塔



210.2  
Kur  
(94)  
図書館

報告書抄録

| 書名     | 中峰古墳群発掘調査報告書                            |                 |  |  |                              |              |                                  |
|--------|---|-----------------|--|--|------------------------------|--------------|----------------------------------|
| 副書名    | —                                       |                 |  |  |                              |              |                                  |
| 巻次     | —                                       |                 |  |  |                              |              |                                  |
| シリーズ名  | 倉吉市文化財調査報告書                             |                 |  |  |                              |              |                                  |
| シリーズ番号 | 第94集                                    |                 |  |  |                              |              |                                  |
| 編著者名   | 岡本哲則                                    |                 |  |  |                              |              |                                  |
| 編集機関   | 倉吉市教育委員会                                |                 |  |  |                              |              |                                  |
| 所在地    | 〒682-8611 鳥取県倉吉市東町722番地 TEL0858-22-4419 |                 |  |  |                              |              |                                  |
| 発行年月日  | 西暦1998年3月19日                            |                 |  |  |                              |              |                                  |
| 所轄遺跡名  | 所在地                                     | コード<br>市町村：遺跡記号 | 北緯   | 東經   | 調査期間                         | 調査面積<br>(af) | 調査原因                             |
| 中峰古墳群  | 倉吉市和田字中峰、盈和寺                            | 31203 : 4DWN    | 35° 26' 34"  | 133° 48' 53"   | 19970401～19971005            | 3800         | 一般国道313号橋りょう整備工事<br>(和田城)に伴う事前調査 |
| 所轄遺跡名  | 種別                                      | 主な時代            | 主な遺構   | 主な遺物   | 特記事項                         |              |                                  |
| 中峰古墳群  | 墳墓・古墳                                   | 弥生・古墳           | 土塁墓 27基<br>土器棺墓 1基<br>壙 3条<br>古墳 4基<br>壁式住居 1棟<br>調査遺構 1条<br>上塙 2基 | 弥生土器・土脚器・陶器・土師質土器・<br>鍬斧・鎌・ガラス小玉・五輪塔・鏡片・<br>砥石・鐵石・磨石・茶石・錢貨 | 弥生時代末期から古墳時代前期に連続する土塁墓群と古墳群。 |              |                                  |

---

中峰古墳群発掘調査報告書

平成10年3月19日 印刷

平成10年3月19日 発行

編集 倉吉市教育委員会

印刷 ㈲池田印刷

---